IS　インフィニット・ストラトス　中毒者

ヌタ夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　インフィニット・ストラトス　　中毒者

【Ｎコード】

Ｎ６５５２Ｔ

【作者名】

ヌタ夫

【あらすじ】

ナノマシン強化兵士の少年。闘いでしか生きていることを実感できない心と体はＩＳの世界でどう生きるのか、変わるのか。それとも・・・・・・。

プロローグ（前書き）

初めて投稿いたします。至らぬ点もございますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

プロローグ

プロローグ

いつも自分の呼吸だけが聞こえていた。　顔が青ざめ、体温が低くなるのは日常茶飯。どうしようもない。生まれた頃から病弱で、いきなり意識を失う事もあった。子供ながらにいつかは死ぬんだと思っていた。

だが、俺はそんな人生に別れを告げた。

ナノマシン強化

その実験台に選らばれ孤児院から施設に引き取られた。神経強化と身体強化により生まれ変わった俺に待っていたのはスイス軍のナノマシン強化部隊『万能薬≪アルハイルミッテル≫』。軍での生活は辛いものがあったが、すべてが楽しかった。体が動く喜びや大地の感触、特に闘える喜びは何物にも代えがたかった。

なれないと思っていた、ヒーローのように闘える。昔話の騎士のように、相手と自分、互いに持てる限りの力を使い戦う。そんな風にできることが楽しくてしょうがなかった。

本当に楽しくて、嬉しくて、あんなにも生きていることを実感できる時間は無かった。　相手を殴る感触、皮が裂けて血が流れる、あの血沸き肉躍る感覚。あれが忘れられない。自分の体に生まれる痛みや興奮。それすら喜びだった。

俺には生きる目的ができた。

闘い。

闘えるのならば、何でもする。血反吐を吐いて、立ち上がれなくなるまで、命が果てるまで。死ぬ瞬間、その一瞬まで闘い続ける。俺が俺であるため、生きていると実感するために、俺は闘い続ける。

いつも通りに警備部隊のブリーフィングを終えたとき、俺に地下ＩＳ格納庫前に行くように上官より命令が下った。詳しい内容は言われなかったものの、悪名名高いＩＳ部隊からの呼び出しである、きっと碌なことではない。警備隊員の一部から死地に赴く兵士のように敬礼をされ、呼び出し場所である地下ＩＳ格納庫前に来たのだが、約束の時刻になっても相手は現れない。待たされること２０分。戻ろうかとした時、彼女は現れた。

「おまたせ～」

見計らったかのように軍服に身を包み、ブロンドのストレートヘアをなびかせて近づいてくる彼女は悪びれた様子もなくこちらに手を振ってくる。

「……アンベール少尉、用件は何でしょうか？」

「いつも通りでいいわよ、テオ。私とあなたの仲じゃないの」

「今は公務中です、そのような言動は出来かねます」

マリー・アンベール少尉はわざとらしいため息をつき、ヤレヤレと言った感じに首を振る。マリーとは研究所からの長い付き合いだ。仲間の中で１つ年下の俺を弟の様によく世話をしてくれた。訓練部隊から俺が警備隊に、マリーがＩＳ部隊に配属された後も時間を見つけては会いに来てくれる良き姉である。

「あなたの階級は私より上の大尉じゃないの？」

格納庫の電子ロック式の扉を開け、俺に手招きをして中に入っていく。

「ＩＳ部隊の機嫌を損ねたくはないので」

マリーに続き、格納庫に入る。中はＩＳ格納庫であるため戦闘機や戦車のそれと比べれば、狭い。最新の機材や資材、ＩＳの武装が並んでいるために余計狭く、窮屈な感じがする。

「そんなに怖いかな、うちの部隊？」

「誤射と言って、警備隊に一斉射撃する部隊は誰だって怖いと思いますが？」

先日、演習場付近を巡回していた警備隊にＩＳ部隊がわざと誤射

する事件が発生。幸い怪我はなかったが、周りの地面がきれいに吹き飛ばされ、その場にいた全員が爆発の衝撃で倒れていた。
「だって、二股かけてうちの部隊の子を弄んだのよ」
原因は痴情の縺れ。彼女持ちの隊員がＩＳ部隊員と遊び半分で付き合ったのが事の発端。問題の隊員は原因をＩＳ部隊員に転嫁した。そのせいで恨みを買い復讐という名の地獄を見ることとなった。
「ですが、やりすぎです……他の隊員の巻き添えにすることはないでしょう」
一緒に巡回していた隊員たちも巻き込まれ、仲良く治療とカウンセリングを受けている。
これでうちの部隊に女性恐怖症の隊員が誕生するのは何人目だろうか。うちの隊長は度重なる問題でノイローゼ状態。おかげで俺に回ってくる事務仕事が増え、いい迷惑だ。
「あ～、あれはごめんね。何か、つい……ね？」
「隊長は今回の件を誤射という事で処理しましたが、今後あのようなことがあった場合、上層部に報告するとのことです。」
「と言いつつ何度も見逃してくれてるじゃない。あ、もしかしてそっちの隊長さん、うちの誰かを好きになったの？」
「さぁ？　単にこれ以上そちらに関わる仕事をしたくないんじゃないですか？」
「ちぇっ、テオには冗談が通じないのね」
「今は公務中ですので」
そんな話をしつつ、格納庫内部を進んでいく。周りではＩＳのメンテナンスや武装の組み立て、コンテナの搬入作業で忙しなく人が動いている。その中をマリーは慣れた足取りでさっさと進んでいく跡になんとかついて行く。
「そう言えば来年ですね」
「え、……なにが？」
近くを通る同じ部隊員に手を振っていたマリーが首をかしげながらこちらに向く。

「ＩＳ学園への入学です」
　来年で１５歳になり、高等教育を受けられる。スイスはデータ収集の目的でＩＳ部隊の人間をＩＳ学園に最低一人いるようにしている。今年で学園にいたメンバーが卒業してしまうため、来年に入学させられることとなった。
「あぁ……そうね……」
「どうかしましたか？」
今まで明るかった表情がいきなり思いつめた表情に変わる。
「う～ん、あなたがね……」
「自分がどうかしましたか？」
「ＩＳ学園に行ったら３年間は長期休暇にしか帰ってこられないじゃない？」
「そうですね」
　ＩＳ学園はＩＳについて学ぶ以外は普通の高等教育機関と同じで３年間はＩＳ学園のある日本での寮生活。基本的に返ってこられるのは夏休みなどの長期休暇だけである。
「その間、誰があなたの世話をするの？」
「……はい？」
「誰かに預かって貰おうかしら？」
　マリーは俺をペットか何かだと思っているのだろうか。ＩＳが登場してから世界は女尊男卑に変わり、女性が偉いというのが当たり前となった事で男を奴隷やペットのように思うように扱う者も少なくない。
「人をペットみたいに言わないでください」
「冗談よ、誰もペット扱いしてないわよ。かわいい弟なんだから」
「そうですか……なら、よかったです」
　いつものマリーの冗談。本人は頑張ってネタを考えているらしいが、今まで誰かが笑ったためしがない。なんでこんなにもくだらない冗談を思いつくのだろうか……。
「う～ん、……その話し方だと調子が狂うわ」

「申し訳ありません、公務中ですので」
普段なら彼女にはタメ口で話すが、公務中に限っては敬語を話すことにしている。マリーはいつも調子が狂うからやめろと言ってくるが、俺はやめるつもりはない。何事にも切り替えは必要だ。とくに公私は分けなければならない、目的のためには……。

「オイラーさん、テオを連れてきました」
「ありがとう」
マリーは格納庫隅に着くと、そこにいるＩＳを取り囲む一団の一人に手を振って、俺を連れてきたことを告げた。
爆発したようなクセ毛を掻きあげて、こちらを見ずにスイスＩＳ開発研究部主任兼ナノマシン兵装開発担当　オイラー博士。彼女に対し敬語を使う人は俺を含めた数人しかいない。そのせいで一部の人間から軽く見られがちだが、スイスのＩＳ開発において、彼女は重要な人物である。ＩＳ発表以前は生体強化ナノマシンの研究をしていたが、ＩＳが公表された直後にその構造をいち早く理解し、すぐに研究すべきだと進言。軍は『白騎士事件』が発生するまで、その発言を気にも止めなかったが、有用性が実証されると博士をＩＳ開発主任に命じた。それから5年以上も開発主任の座にとどまり続け、数多くの武装を開発している。まさに『兵器開発の鬼才』と呼べる人物。
どうやら博士からの呼び出しであったらしい。
「何か御用ですか？」
軍から俺個人に対する呼び出しは隊長の未提出書類の件を含めて、いくつか思い当たるものがある。だが、博士からの、直接の呼び出しには思い当たるものが無い。
「ん？　マリー・アンベール少尉、彼に説明しなかったのかい？」
「すみません。私が説明するよりも、オイラーさんに説明してもらう方がいいと思って説明してません」

いや、説明しておけよ。心の中、思わず素の自分でマリーに突っ込みを入れる。
「……まぁ、いいか」
博士は自分の頭を持っていたペンで掻き、近くの機材へと向かいキーボードに指を走らせた。
「テオバルト・ヴァイスマン大尉、これを見てみなさい」
「これは……嫌がらせですか？」
博士が指さしたディスプレイをのぞき込むと、ウインドウにびっしりと俺の名前が書き連ねられていた。気持ちが悪くなるぐらい画面の上から下まで埋まっている。こうなると、嫌がらせというよりも模様に近い。
「違う、これはこのＩＳのコアから出されている信号を言語化したものだよ。」
博士が目の前のＩＳを指さす。『ＩＳ』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。現在の国力の象徴と言っても過言ではない。目の前に居るそれは、カーキ色の無骨な装甲に覆われ、まるで小型の戦車ともいうべきシルエットをしている。
「コアからの信号に何故自分の名前が？」
まさに冗談とも取れるような事象だったが、周りの空気と博士の目からそれが真実だとわかった。
「わからない。だけど……」
「だけど？」
「……コアが君を求めているのかもしれない」
「コアが……自分を求めている？」
「ああ、そうだ。ＩＳには意識的なものが存在していると聞いたことは？」
「あります」
操縦者の特性を理解するために自我にも似た学習能力が付いているとＩＳを特集した図書で読んだことがある。特性を理解してより

進化すると書かれていたため、「まるで生き物だな」と思ったのが記憶に残っていた。
「おそらく、それが君を選んだんだ。選別の基準はわからんがね」
「……そんなことがあるんですね」
個人的にＩＳについて調べていたが、人がＩＳを選ぶことはあれ、ＩＳ自身が搭乗者を選ぶとは聞いたことはない。もしかしたら、欠陥持ちとして処分され、別の機体として作り直されているだけかもしれないが……。
「感心するのは後にして、機体を触ってみてくれ」
「……はい？」
「このコアを搭載したのがこのＩＳなんだけど、どうやっても起動しないんだ。もしかしたら君が触ったら動くかもしれない」
「待ってください、何故自分なんですか？」
「何故って、博士が言ったじゃない。コアから出ている信号がテオの名―」
「お言葉ですが、あれは偶然か悪戯なのでは？」
マリーの言葉を遮るように進言する。ＩＳに触れるのは素直に嬉しい。警備隊の仕事ではＩＳに触ることはないため、機体に触れることにワクワクはしている。だが、所詮俺は男だ。ＩＳは女性にしか扱えない。男には操縦どころか、起動することもできない。触ったところで結果は見えている。
「そうかもしれない……」
「ならば、自分が触るのは無意―」
「だけど、そうでないとも言える。それにこれは命令だ、テオバルト・ヴァイスマン大尉」
博士の命令には逆らいたくはない。ナノマシンを作ったのは誰でもないオイラー博士である。実験体として利用されたのかもしれないが、病弱でいつ死ぬかもしれない俺を変えてくれた博士は命の恩人と同じだ。恩人の命令には絶対従うべきである。
それに心のどこかで「もしかしたら……」と思いがあり、これを

動かしたらどうなるのか、どんな感じがするのか、そんな風に動かしてみたいという思いが、心が……。
「……了解しました……」
軍服の袖をまくり、手をかざしＩＳに触れた瞬間、視界が黒で覆われ意識が飛んだ。

暗く、闇に閉ざされた中に漂うように俺はいる。上も下も、夢か現かもわからない空間。
『やっと会えた……』
頭の中に声が響く。
『会えた？……誰に？』
周りを見渡そうとするが、視界は依然黒で覆われたままで何も見えない。
『君に決まってるじゃない……』
『何故だ？』
『何故って、―だからだよ……』
『ちょっと待て、どういう事だ？』
理解できなかった。
―だと言われてもいきなりすぎて意味が分からない。―だと？もし、本当だとしたらこいつはいったい誰なんだ。少なくとも―と言われる記憶はない。
『大丈夫、君のそばにずっといてあげるから……』
何かが自分に巻きつく。まるで抱きしめられる感触のような、束縛される感触。締め付けられる感覚と共に、声が染み込むように中に入ってきた。
『だから……ずぅーっと一緒にいてね』
体がねじられる感覚と共に俺の意識が再び飛んだ。

俺は手を前に突き出したままで立っていた。ボーっとしていて気がついたときや夢から目が覚めた時の感覚。夢か現か分かれない漠然とした気分のまま、周りを見る。
手を触れたときの状況と何ら変わりはなかった。違いを挙げるならば、目の前にあったはずの戦車のようなＩＳは消滅したかのようにその場から消え、俺の右手首に鎖が巻きついていたことだ。一体さっきのあれはなんだったのだろうか。
「ふむ、……待機状態になったか……」
気がつくと周りから驚きの声が上がっていた。その視線は俺と腕に巻きついているベルトに注がれている。
そうか……。なんとなく判った、判ってしまった。
「テオバルト・ヴァイスマン大尉、今……何が起きたと思う？」
「さっきの機体が消えた……というか、ＩＳを俺が消した……ですね？」
機体が消えたという事は、文字道理の意味で消す以外には粒子状態へ変えるしかない。文字通りの意味でＩＳを消すような力はいくら強化人間といえど、俺には無い、つまりは……。
「正確にはＩＳを起動させ、粒子状態にしたのち、待機状態にしたんだ」
「……」
ＩＳの登場以来、男がＩＳを起動させたことはない。信じられないが、もし本当ならば、意味するものは……異常、もしくは奇跡である。
「そんな……馬鹿なこと……あるわけ―」
「だが、実際に起きた。マリー・アンベール少尉……ここにいる全員がそれを見た」
マリーが否定しようと事実は変わらない。博士を含め、全員が粒子になったＩＳが俺の腕に巻きつくのを目撃している。
左腕の肘から手首にかけて巻かれているカーキ色の布ベルト。ＩＳはフィッティングをした操縦者の体にアクセサリーとして待機す

るらしい。アクセサリーという類の物をつけた事がないからか、体温のような生暖かさを感じる……。
「けど、展開はできるんですか？　待機状態になっただけじゃ？」
「確かに……よし、テオバルト・ヴァイスマン大尉。ＩＳを展開できるか試してくれ」
「展開……ですか？」
展開とはたぶん待機状態から機体を起動させることだろうが……。
「どうしたんだ、テオバルト・ヴァイスマン大尉？」
「展開とは……どうすればいいんでしょうか……」

余談だが、しばらくの間『初めてＩＳの展開ができた男』というよりも『初めての展開に半日費やした人間』で驚かれる事になった。

第一話　出会い（前書き）

ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

第一話　出会い

第一話

夢の中で記憶が最初から繰り返される。頭の中ではこの先の展開はわかっているはずだが、思い出せない。まるでビデオのリプレイのように、現実と思わせるほどの濃密な夢。夢と思わせるような希薄な現実。混乱。何が現実で、なにが夢なのか分からない。現実が現実であって現実ではないのか、夢が夢であって夢でないのか。理解できない。わからない。

苦しい。

病弱だった小さい頃の苦しみ。自分が世界から切り離され、虚ろになっている。逃げ出したいが逃げ出せない。戦いたいが戦えない。まさに生き地獄、死ですら救済に見える無限の苦しみ。いつになったら終わるんだ……。

「…たい……大尉、テオバルト・ヴァイスマン大尉、大丈夫ですか？」

目が覚めた。

運転席から振り返るようにして男が心配そうな顔で見ている。空港からここまで送ってくれたスイス大使館の職員か……。どうやら座ったまま寝てしまったようだ。

「眠ってしまって申し訳ありません。すぐに降ります」

「予定よりも３０分早く着いているので急がなくても大丈夫です。それよりもうなされていたようですが、体調が優れないのですか？」

「体調は……良好です、嫌な夢を見ていただけです」

自分が座っていた後部座席からドアを開けて外に出る。

「送っていただきありがとうございます」

「もう暗いので、気を付けて行ってください」

「はい、ありがとうございます」
礼を述べ、走り去っていく車を見送り、手をつねる。
肌が指で圧迫され、赤くなる。痛みはある……どうやら夢でなく現実のようだ。起きて手をつねる癖。夢か現実か見分けるために始めた習慣であるが、これすらも夢でないかと疑ってしまう。しかし『リアルな夢』を見る俺に確認する手段は無いのだから疑ったところで無意味なのである。
手をつねるのをやめ、後ろにそびえる門に向く。
ＩＳ学園の正面ゲート。
軍の正面ゲートとは違い、周りに守衛はおらず、門は開放された状態であった。セキュリティーに絶対の自信があるのか、それとも唯の平和ボケかと考えつつ、足を踏み入れる。
今日から3年間ここで生活するのか……。

２年前のＩＳ起動後、体の隅から隅まで調べられたが、俺がＩＳを動かした原因は分からなかった。身体強化ナノマシンが影響を及ぼしたのではないのかと、男性ナノマシン強化兵士全員を検査したが、ＩＳが反応する者はおらず、検査は無駄に終わった。とりあえず、原因究明も兼ねてＩＳ部隊に異動が決定。以後、軍のＩＳパイロットとして訓練され、扱き使われることになった。

「久しぶりだな……ヴァイスマン」
「お久しぶりです。」
一週間前、基地内の更衣室で荷物をまとめていると、昔の上司、ブルクハルト警備部隊長が声をかけてきた。声の感じと目の下にクマから、以前にも増して気苦労が多いのがうかがえる。

「元気そうでよかった……」
警備部隊長は近くの備え付けられた長椅子に腰を降ろすと、俯いて溜息をつく。
「ところで今日はどのような用件でしょうか？」
「ちょっとからお前を連れて来るように言われてな……」
疲れた顔に、虚ろになりかけている眼でこちらを向き、俺を指さす。
「隊長が直々に連れてくるようにですか？」
「あぁ。オイラー博士の命令では断るわけにもいくまい……」
オイラー博士が誰かを呼ぶときは基本、ＩＳ部隊員か、サポートの研究員に呼ばせる。わざわざ警備部の、それも部隊長を呼び出したりはしない。
「博士の用とは一体何でしょうか？」
わざわざ警備部隊長を使って呼びつけるのだから、余程の事なんだろう。
「さあな。ま、聴いてみればわかることだ。そんなに深く考えるな。あまり考え過ぎると俺みたいにノイローゼなるぞ……」
「……気をつけます……」

「テオバルト・ヴァイスマン大尉、貴官のＩＳ学園入学が決まりました。ブルクハルト警備部隊長、机の封筒に書類が入っているので手続きを頼みます。ではよろしく」
研究室で待っていたら博士はあっさりと現れ、早口で用件を言い終えると、さっさと出て行こうとする。
「博士、マリー・アンベール少尉の在籍と特異ケースであることから俺の入学は予定されてなかったのでは？」
「詳細を一緒に入れてある。後日正式な辞令が送られてくるから」
それだけ言うと、部屋を出て行ってしまった。あまりの速さに夢

ではないかと疑いたくなるが、これが現実である。
　机に置いてある封筒には入学手続き書類とファイルが入っていたが、ファイルには俺の偽造された経歴などが記されているだけで、おおよそ俺が入学する理由となるものは無い。後日正式な事例が送られてくるのを待って聞く他ないようだ。
「とりあえず、入学手続き書類の記入だけ済ませましょうか？」
「そう……だな」
「……ブルクハルト警備部隊長？」
　様子がおかしいと思って見ると青白い顔のまま、虚ろな目のまま立ちつくしている。
「隊長？」
「なあ……俺って……何なんだろうな」
　その後、ストレスと過労で倒れた隊長が目覚めるまで事情聴取で拘束される羽目になり、宿舎にも戻れずに朝を迎え、訓練と入学手続きに追われた。
　ちなみにオイラー博士が警備隊長を呼んだ理由は面倒な手続きをさせるためだけだった。
　ブルクハルト警備部隊長に幸あれ……というか、休暇あれ。

　本来なら入学の予定はなかった。だが、特異ケースの発見と彼のＩＳ学園入学が状況を変えた。
　織斑一夏。
　俺と同じ、男でありながらＩＳを動かせる彼のもとに、同年代の俺を入学させることで特異ケースのデータが盗みやすくなるだけでなく、俺の実験機が実戦経験を積め、各国代表候補生の専用機データ、特に第三世代機『ブルー・ティアーズ』のデータを奪い、研究解析すれば開発計画が確実に進むと言う博士の言葉が上層部を動かした。
　祖国、スイスは周りを欧州連合に囲まれた状態で未だに永世中立

を保とうと必死になっている。国際的組織の本部や世界の重鎮御用達の銀行があること、国民皆兵による圧倒的兵数が諸国を牽制する材料になっていたが、ＩＳの登場により状況が変わった。永世中立を守るためにはＩＳが必要不可欠。諸外国と同様に第三世代機の開発が急務となっている。

だが、政府高官たちが望んでいるのは第三世代機よりも、とあるテーマのＩＳ。

『永世中立を守るためのＩＳ』

現在オイラー博士と欧州連合や海外研究機関からの引き抜いた研究員や技術者で、ＩＳ開発を行なっているが、上層部が求める『永世中立を守るためのＩＳ』は完成していない。開発の手掛かりになるようなデータや情報を集めてくるのが俺の入学に課せられた条件だが、正直どうでもいい。

データは博士の命令だから収集するが、『永世中立を守るためのＩＳ』とかは別にどうでもいい。俺の目的はただ一つ、『闘い』のみ。

闘えるのなら、それで構わない。

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

夕食後の自由時間、寮の食堂。壁にはでかでかと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が張られている。

（……はぁ）

騒ぐクラスメイトの中、パーティーの主役であるはずの織斑一夏だけは騒ぐ気にはなれなかった。

本来ならば対決で勝ったイギリス代表候補生セシリア・オルコッ

トがなるはずだったが、辞退。大人げなく怒ったことを反省し、ＩＳ操縦技術の上達にはには実戦で経験を積むのがベストと言って、クラス代表の譲ったのだ。本当はセシリア・オルコットの「彼のことがもっと知りたい」という異性への好意がそこにはあるのだが、そのことを彼は知る由もない。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

ＩＳ学園に入学して織斑一夏と六年ぶりの再会を果たした篠ノ之箒は不機嫌そうにお茶を飲み干した。恋敵の出現と女子に囲まれた思い人の態度が気に食わず、箒の機嫌は今すこぶる悪い。

「……」

「なんだよ、箒？」

「何でもない」

それにつけて、新聞部の先輩が一夏とセシリア・オルコットの手を強引に握手させたものだから、箒の機嫌はどんどん悪くなっていく。

「ずいぶん盛大にやっているな」

「千ふぐぇ！！……織斑先生、どうしてここに」

思わず姉の名前を言いかけ、気づいた時には一夏はクラス担任でもあり、姉でもある織斑千冬によるチョップの洗礼をうけていた。普段は学級名簿なのでそれに比べれば幾分か痛みは少ないが、十分な威力と痛みが伴っている。

「以後気をつけろ。織斑、部屋替えだ。」

「え、……部屋替え？」

一夏は担任から言われた言葉が一瞬、理解できなかった。

「言ったはずだぞ、今日新しく来る生徒と同室になってもらうと……」

「て、転入生と？！」

「ど、同室！？」

一夏と織斑先生の話に聞き耳を立てていた周りが一斉にざわめき

始めた。あれこれと憶測やデタラメが飛び交う中、『転入生と同室』について、セシリアと箒は一夏に詰め寄る。
「どういう事だ！？」
「どういうことですの！？」
「す、すまん……すっかり忘れてた」
朝のＳＨＲの後に呼び出され言われていたが、授業や放課後の特訓に追われて彼の頭からすっかり抜け落ちっていた。
「しかも同室だと！わたしという―いだ！！」
「なぜ、私ではなく転入―キャッ！」
「うるさいぞ！　静かにしろ！」
興奮し、胸倉を掴む勢いで身を乗り出していたセシリアと箒。だが、織斑先生のチョップにより制止を余儀なくされた。
「詳しい事は明日訊け、いいな。」
「「はい……」」
「織斑、部屋まで案内する。さっさとついてこい」
「え、でも荷物は？」
部屋替えを忘れていた為、荷物の準備が終わっていない。
「そんなものは後にしろ」
「はい……」

「寮のことで何かあったら、一年寮長の織斑先生に聞いてね」
「了解しました。笠幡教官」
持っていた荷物をベッドに置き、敬礼をする。
「ここは学校だから『教官』は『先生』って言ってくれる？　あと、敬礼はしないでね。」
そう言っていきなり、おっとりとした顔をグイッと俺の目の前に出してきた。
「りょ、了解しました、笠幡…せ…先生」

いい馴れない敬称を言った恥ずかしさと、いきなり目の前に顔を出された驚きから、思わずたじろいでしまった。
「うん、よろしい」
満足げに頷くと笠幡先生は部屋を見回し始めた。時折、調度品や備え付けの家具に付いた傷を見つけてはクスクスと笑っている。
笠幡先生こと笠幡清子は４組のクラス担任。俺が担当クラスに転入するため、寮長に変わり、簡単な規則の説明や寮の案内してくれた。ここの卒業生で、ＩＳ学園にかなり思い入れがあるようだった。
「楽しそうですね、笠幡先生？」
「楽しいわよ、昔を思い出すのは。特にこの部屋は私がいた部屋だし」
「そうですか……」
軍での生活が長いため、学園生活に対してイメージがわかない。話を聞いた卒業生たちは楽しそうに思い出話を語り合っていたが、そんなに軍の生活と大して変わらんだろう。
「それにしても君、荷物少ないね」
ベッドと机の上に置かれた俺の私物を見て笠幡先生が言う。持ってきたものは多少の衣類に日常必需品、選別でもらった懐中時計、携帯食料などである。
「そうですか？　これでも多い方かと……」
「ほれ、さっさと来い」
部屋のドアが開き、ジャージ姿の教員と思しき人が入ってきた。
「一年寮長の織斑千冬だ、貴様のルームメイトの織斑一夏を連れてきたぞ」
織斑先生の後ろからこちらを覗き込むように男が顔を出しす。
テレビや雑誌、新聞で何度も見た顔だ。俺以外にＩＳを操れる男。
「え、男……なんで？」
こいつが織斑一夏。
その瞬間、俺は嬉しさに似た、魂の高ぶりを感じた。

「え、男……なんで？」
一夏は見間違いかと思ったが、シルエットはがっしりとした男の、軍人のそれであった。黒ずんだブロンドの髪、血のように紅い眼をした彼は一夏を睨みつけている。
「「「えーーー！？」」」
叫び声の方を見ると開け放たれたままのドアから女生徒が多数覗き込んでいる。
「う、嘘！？」
「え、なにこれ？！」
「なんで男の子が！？」
「どういうことなの？！」
廊下にいる野次馬がざわざわと騒ぎ始める。
「うるさいぞ小娘共！　さっさと部屋に戻らんか！」
思い思いに騒いでいた野次馬は織斑先生の怒号に、蜘蛛の子を散らすようにして一斉に帰っていった。
「まったく、手の掛かる奴らだ」
「あら、元気があっていいじゃないですか。私はお通夜みたいな雰囲気で毎日過ごすぐらいなら、多少手がかかる方がいいと思いますよ」
眉間に皺をよせ、苦い顔をしている織斑先生に満面の笑みで笠幡先生が微笑みかける。
「笠幡先生、それはそうですがあいつ等は……」
「あの、織斑先生？」
恐る恐ると言った感じで部屋にいた一夏以外の男が笠原先生と織斑先生の話を遮るようにして声を掛けた。
「なんだ？」
「彼が……織斑一夏君ですか？」
「そうか、紹介がまだだったな。こいつが織斑一夏だ。織斑、こい

つはテオバルト・ヴァイスマン。スイス出身の……お前と同じＩＳを使える男だ」
「あ、よろしく……って、えーっぶぅ！」
「静かにしろ」
「はい……」
一夏は新たに知らされた事実に思わず驚きの声を上げた。だが、織斑先生にチョップで一喝され、痛そうに頭を押さえつつ返事をする。
「織斑君、ヴァイスマン君は４組で違うクラスだけど、できる限り面倒みてくれる？」
「え、あ、はい」
笠原先生に手を合わせながら頼まれ、一夏は戸惑いながらも返事をする。
「ヴァイスマン」
「何でしょうか」
「聞いた通りだ。わからんことがあったら、織斑に訊け」
「了解しました」

笠幡先生と織斑先生たちが帰った後、俺は荷物を取ってくるという織斑一夏について行くことにした。
寮の中を歩いていると、笠原先生と来た時よりも向けられる視線の数が多くなっている。廊下の端でこちらから隠れるように話すグループや、見つからないようにドアから頭だけ出して覗いている者たち。どれも織斑一夏が話しかけると、必ず逃げるように立ち去るか、部屋に入ってしまう。「なんなんだ？」と織斑一夏は言っていたが、当り前だろう。ここ、ＩＳ学園で男はいわゆる珍獣奇獣の類と同じ、１人いるだけでもおかしいのに、もう１人いたら何かあると考えて逃げ出すだろ。
「あ、そうだ……」

「何ですか？」
「俺のことは一夏って呼んでくれて構わないけど、何て呼べばいい？」
「……」

「『ブルー・ティアーズ』よりも『白式』のデータ収集が優先ですか？」
「あぁ、そうだ」
出発前日、オイラー博士より告げられた命令に俺は首をかしげた。
現在、スイスのＩＳ強化開発計画においてもっとも重要なのは、欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』の次期主力機候補、イギリスの『ブルー・ティアーズ』のデータ収集と解析であるはず。日本の男性操縦者のデータとその機体データは収集対象であるものの、特殊ビーム兵器、ＢＴ兵器を有する第三世代機に比べると優先順位は低いはずだ。
「何故って顔をしているね」
「いえ、そんな……」
「君を含めての男性操縦者と機体データは貴重だから、それだけだよ。」
「……」
だとしても、おかしい。博士はいったい何を考えているんだ……。
「国際問題に発展するような行動をしなければ……収集データ種類と収集方法、データの提出時期は任せるよ」
「良いのですか？！」
博士の言葉に胸が高鳴った。
国際問題に発展しない方法でデータ収集の許可。完全ではないが、自分勝手ができるという事と同義であった。
「構わないよ。期限はＩＳ学園在学期間中だが、上も収集方法と収

集データの選別は君に一任すると言っている……思う存分やっていいよ」

「どうかしたか？」

「いえ、なんでもありません」

恩人である博士の命令というだけで従うつもりでいたので特に考えていなかったが、博士と上層部は『男がＩＳを動かせた理由』を躍起になって調べていた。比較対象として同じ男性操縦者である織斑一夏のデータが欲しかったのだろう。『男がＩＳを動かせた理由』を何に利用するかは気になるところであるが、そんなものは重要ではない。今、重要なのは自分勝手なデータ収集ができる。つまり、実際に闘って実戦データを提出しても良いという事、闘えるという事。

一瞬、ここで織斑一夏に喧嘩を吹っかけ、決闘まがいのことをしようと考えたが、やめた。

織斑一夏、男の専用機持ちと闘えば、自機の経験蓄積とデータの収集もできる。しかし、織斑一夏はＩＳに触れてまだ間もない。そんな相手と闘っても意味は無い。俺の望む闘いとは全力と本気のぶつかり合い。言い表すなら『果たし合い』や『決闘』、そういったものである。未熟な自分を鍛え、高めた状態で闘った時の高揚は何とも言い表せない。織斑一夏には悪いが、奴では俺を本気にさせ、全力を出させる事ができるとは思えない。

「で、何て呼べばいい？」

「……テオでお願いします」

織斑一夏は卵だ。卵も成長させれば鳥となる。どうせ楽しむなら、一口で終わる卵単品よりも様々な味と触感を楽しめる鳥のフルコースの方がいい。うまいと思った事は無いが……。

「そうか。よろしくな、テオ！」
「よろしくお願いします、一夏」
今は仲良くしておこう。鳥のフルコース、成長した奴との闘いを楽しむために。

「いやぁ、それにしても助かった……話し相手少なかったからさぁ」
テオを連れて一夏は以前の自室、１０２５室へ向かっている。部屋替えに関して文句も何もないが、私物がない状況は些か問題がある。朝のＳＨＲ後に言われ、放課後に準備をするつもりであったが、放課後の特訓とクラス代表就任パーティーにより、忘れていた。姉である担任の織斑千冬に食堂から新しい部屋へ連行されたことで、ようやく荷物をまとめに行けるのである。
「昼休みや放課後ならば、話し相手ぐらいにはなりますよ」
「お、サンキュウ」
（やっぱ男同士はいいな。気兼ねなく話せて）
ＩＳ学園はＩＳが女性にしか扱えないという特徴から女子高と化している。一夏は女性に対して苦手意識は無い。話しかけてくれるクラスメイトや同級生、上級生は多いが、周りが異性ばかりだとさすがに意識してしまう。
「ここで待っててくれ、中のやつにちょっと話するから」
部屋の前に着くと箒を驚かさないため、テオに入口の脇で待っていてくれるように頼む。テオが頷くのを確認し、ドアをノックして中にいる相手を呼ぶ。
「なんだ一夏か……」
「なんだってのはないだろ、なんだってのは」
ドアが開くと、食堂で別れた時と同じ不機嫌そうな箒が出てきた。寝間着である浴衣に着替えており、これから寝るところだったようだ。
（悪いことしたかな……）

「ふん、何の用だ」
「ほら、俺今日から別の部屋だろ。だから荷物取りに来たんだ」
さっさと中に入って取ってくれば良いのかもしれないが、幼馴染である箒に対してするのは気が引けたため一言断ってから持って行こう考えていた。
「新しいルームメイトと仲良くやるのだから、荷物などいらんだろう」
何という滅茶苦茶な考え方であろうか。しかし、眠ろうとして邪魔されればだれでも機嫌は悪くなるだろう。理不尽なことを言うのも仕方ない。一夏はどうやれば箒の機嫌が良くなるかを考えつつ、なんとなく箒の浴衣姿を見た。
「あれ？」
「な、なんだ？」
「帯が新しいやつだな」
「よ、よく見ているな」
少しだけ機嫌が良くなったのか、先ほどまで声にあったとげとげしさがなくなっている。
「いや、色も模様も違うから、そりゃ気づくだろ。箒を毎日見てるからな」
「そ、そうか。私を毎日……」
「？」
箒は何故か上機嫌になり何度もうなずき始めた。
「まぁ、確かに荷物は必要だな。特別に許すとしよう、持って行くといい」
何故、機嫌が直るどころか上機嫌になったのか分からないが、荷物を持ち出すのを許した箒に、ほっと胸をなでおろす。
「そうだ、箒に紹介したい奴がいるんだ」
「ん？　紹介したい奴？」
「ああ、ルームメイトの転入生、テオだ」
一夏は入口の脇に居たテオを紹介する。躊躇しつつテオがドアの

陰から姿を現した。
「……どうも、はじめまして。テオバルト・ヴァイスマンです」
「……し、篠ノ之箒だ」
目を点にして驚いている箒にテオは居心地悪そうにしている。
（どうしたんだ？）
一夏はなぜ二人が驚いたり、居心地悪そうにしているのか、わからなかった。
「……ず、ずいぶんと身長が高いのだな」
「自分の国では同年代と比べれば少し高い程度です」
「そ、そうか……ずいぶんと体つきがいいな」
「軍隊にいたのでそのおかげです」
「なんとなく思ったけど、やっぱ軍隊にいたのか」
「そ、そうなのか……ずいぶんと男っぽい声だな」
「男ですから」
「お、男か……そ、そうか……なにーー！？」
（おかしな奴だな……なんで叫んでるんだ？）
テオの入学は今のところスイス軍関係者と学園の教員しか知らず、世間と学生への公表は明日行われるはずだった。一夏以外の男性操縦者が入学したのを知っているＩＳ学園の生徒は一夏を除いて数名しかいない。故に箒が驚くのも無理はないことであった。
そのことに気づいたのは、箒の驚いた声を聞きつけた寮生がテオを見て騒ぎ始め、その騒ぎを聞きつけてさらに野次馬が集まり始めた後、あまりの騒がしさに織斑先生が登場し、寮内を騒がせた罰として一夏とテオにチョップを喰わせた後だった。

第一話　出会い（後書き）

うまく書けていませんが、感想よろしくお願いいたします。

第二話　昂進（前書き）

遅くなりました。　いつも通りグダグダでふ。

第二話　昂進

ピット・ゲートより射出される機影が一つ。
デュノア社製第二世代量産型ＩＳ『ラファール・リヴァイブ』通称リヴァイブ。安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体。初期第三世代型に劣らず、操縦者と装備によっては最新第三世代型と互角か、それ以上の結果を出すことも可能である。リヴァイブに搭乗している少女は俺を睨みつけた。ハイパーセンサーによりはっきりと見える彼女の蒼い瞳には、身の程をわきまえない悪党に対する正義の味方が抱くような静かな怒りの炎が映っている。
４枚の多方向推進翼、肩アーマーに４枚の物理シールドを備えた学園の訓練機。武装は展開されておらず、手ぶらの状態で開始地点へ到達する。武装の展開には熟練者でも数秒の時間を有する。事前に展開しておく方が、相手への牽制や試合を有利に進める意味でもよい。俺も既に自身の機体『シュランゲ』の主力武装である小型ガトリング砲《バルカンｖｅｒ．　１４》（以降バルカン１４）を展開し、右脇に抱えるようにして構えている。
それほど腕に自信があるのか……。
経験から生まれた自信なのか、増長から湧き出た慢心なのか。どちらなのかはわからないが、どちらだろうと関係ない。互いが傷ついても敵に抗い、自分の知識と力を余すことなく使って闘う。戦場だろうと試合だろうと俺は、俺の薄れた現実を、生を感じられればそれでいい。
俺の人生には『闘い』というスパイスさえあればそれ以外はいらない。

第二話　昂進

「大変だよ！　織斑くん、ビッグニュース！！」
「ん？何だ？」
朝食を終え、教室に来た一夏と箒を迎えたのは、いつものクラスメイト三人組だった。
「これよ、これ！！」
差し出されたケータイの画面に映っていたのはよくあるニュースサイト。芸能や経済、政治などのニュースが画像や動画とともに掲載されている中に、とりわけ大きく『二人目のＩＳに乗れる男性発見』の見出しがあった。
「もう１人のＩＳを起動できる男の子が見つかったんだって！！」
「しかも、ＩＳ学園に転入するんだって～」
「それも、今日！」
「何組になるんだろうね？」
「確か、４組って言ってたぞ」
昨夜、既に笠幡先生と織斑先生よりテオが４組に転入すると知っていた一夏は別段驚きはせず、自分の席につきつつ教えた。
「そうなんだ……ってなんで知ってるの？」
「会ったんだよ」
「「「えーーーー！？」」」
思わず耳を塞ぎたくなるほどの叫びが周りから巻き起き、聞き耳を立てていた他のクラスメイトまでが一夏の机を取り囲むように押し寄せて来た。まるで、狼に囲まれた子羊である。
「ど、どこで？！」
「き、昨日パーティーの時に連れて行かれて、ルームメイトだって

紹介されたんだよ」
「あ、昨日織斑くんと一緒にいた彼？！」
「見たの？！」
「ねぇ、どんな感じの子なの？」
「なんていうか……」
出会ったばかりで漠然としたイメージしかなく、どんな人間かとすぐには思いつかず、言葉が出なかった。
「目つきが悪く、ひどく無愛想。自分勝手な付き合いの悪い奴だ」
一夏がテオを形容する言葉を探していると、窓側の最前列の席に向っていた箒が体をねじ込むようにして、一夏を囲む女子の壁と会話に無理やり入ってきた。乱れた制服と髪が苦労を物語っている。
「箒……」
箒は腹がたっていたのか、テオの事を悪く言っていたが、その言葉は箒自身にも当てはまると気付いた一夏は苦笑し、憐れみと同情が入り混じった視線を向けるしかなかった。
「な、何だ。その眼は……」
「……まぁ、ちょっと付き合い悪いな」
今朝、一夏が朝食を一緒に食べようとテオを誘ったが、「早めに登校しなければならない」と断られた。ならばと思い「昼食を一緒に学食で取ろう」と言ったが、「先約がありますので、またの機会にお願いします」と言って立ち去られた。
「けど、話した感じいい奴っぽかったぜ」
一夏はテオが誘いを断ったことは気にしていなかった。誰にでも優先したい用事や一人で居たい時間はある。今回は偶然それが重なっただけだ。それに物腰は柔らかく、素振りも力を振りかざす粗暴な奴でもなければ、傲慢な高飛車野郎でもなかった。
（会ったばっかりの時のセシリアと箒に比べたら、テオの方がマシだしな……）
そこまで考えて、一夏は知られればセシリアや箒に折檻されかねない事に気付いた。

「一夏さん、みなさんおはようございます」
「え！　あ、あぁ……セシリア。おはよう」
「一夏さん、どうかされましたの？」
「い、いやなんでもない。それよりもセシリア、転入生の噂聞いたか？」
　一夏は丁度のタイミングでセシリアが来たせいで驚き、焦って声が裏返ってしまった。もし、セシリアが高飛車だったとか、箒が粗暴だったとか考えていたのがバレるのはまずい。何とかごまかそうと2人の転入生についての話題をふった。
「転入生？　いいえ初耳ですわ」
「何と、2人も転入生が1年に来るんだよ！！」
「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」
　そう言って手を腰に当てる。一般人のするような真似ごとではなく、品があり、本当の貴族という雰囲気を醸し出している。
「1人は中国の代表候補生で、もう1人はなんとスイス出身の男の子！！」
「そう！　二人目のＩＳに乗れる男子」
「ニュースでもやってるよ」
「……スイス……ですの？」
　スイスと聞いた瞬間セシリアの表情が険しくなった。
「どうしたんだ、セシリア？」
「い、いえ、ただ……一夏さんと同じように専用機を持っておられるのかと思っただけですわ……」
「そうか……」
　一夏はセシリアがどこか誤魔化しているように感じたが、それ以上は追及しなかった。
「中国代表の子は持ってるみたいだけど……」
「一夏知っているか？」
「どうだろう、訊かなかったからな……」
　昨夜、一夏とテオは箒の部屋から一夏の私物を運んだあとすぐ眠

りに着いた。運んだ荷物はそれほどなかったが、一夏はクラス代表就任パーティー。テオは旅の疲れからすぐ眠気が襲い、雑談などできなかった。今朝も、テオが起きてすぐに部屋を出て行ったため、話す暇などなかった。

「たとえ、テオくんだったけ？その彼が専用機持ちでクラス代表になったとしても、織斑くんには勝ってもらわないと！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っているのは1組と4組だけだから、余裕だよ」

「―その情報古いよ」

一同が教室の入口から聞こえた声に振り向く。ツインテールの少女が腕を組み、片膝を立てて、ドアにもたれていた。

―酢豚のため省略―

「呼ぶまでここで待っていてくれる？」

「了解しました。笠原教官」

4組の入り口前。授業開始のチャイムが既に鳴っているため生徒は教室に入っており、廊下には俺と笠幡教官しかいない。

「ヴァイスマン君、『教官』じゃなくて『先生』よ」

「申し訳ありません、失礼しました」

訂正する、廊下には俺と笠幡『先生』しかいない。

「次からは気をつけてね」

「はい……」

俺が了承すると「うん、よろしい」と言って教室に入って行った。

どうも笠幡先生は苦手だ。嫌いだとかそういう意味合いではない。何というか変に逆らえないところがあって苦手だ。
「入ってきて」
「失礼します……」
笠幡先生に呼ばれ教室に入っていく。入った瞬間、教室内が静かになり、俺が笠幡先生が立っている教壇横に行くまでの間、かなりの視線が向けられた。
「え～っと、彼のこと知らない子もいると思うから紹介するわね。織斑くんに次いで、二人目の男の子、テオバルト・ヴァイスマン君です」
その一言でクラスがざわめきだした。歓喜や驚愕、嘲笑。様々な声が聞こえる。
ＩＳ　部隊に異動になった時と同じだな。
物珍しさの眼差しがこちらに向いている。
「ヴァイスマン君は男の子だから戸惑う事もあると思うけど、仲良くしてね。ヴァイスマン君、挨拶して。」
笠幡先生に挨拶を促された。
面倒だが、やっておくか……。
拒否する理由もないし、クラスの連中とはある程度親しい仲になっておいた方が今後の活動をしやすくなるだろうと思い、軽く礼をする。
「本日よりＩＳ学園に転入になりましたテオバルト・ヴァイスマンです。日本での生活は未体験のため、ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願いします」
俺のあいさつに対する反応は拍手をする者もいれば、無視する者に嘲笑する者など様々で、「さすが世界各国から生徒が集まるＩＳ学園だな」と少し感心してしまった。
「カラドゥマンオウルさん、クラス代表で忙しいとは思うけどヴァイスマン君の面倒見てくれる？」
「……わかりました」

褐色の肌にセミロングの銀髪の、カラドゥマンオウルと呼ばれた少女はこちらを一瞥し、返事をするとすぐに電話帳ほどの厚さがあるテキスト視線を戻し、読み始めた。
なるほど、勤勉……いや、ガリ勉らしいな……。
「ありがとう。あそこの空いてるところがヴァイスマン君の席だから座ってね」
笠幡先生が指さした席はカラドゥマンオウルの右隣、真ん中の列の最後尾の席。
「了解」
「では授業を始めます。今日は―」

「ねぇ、ヴァイスマン君は織斑くんと同じで専用機とかあるの？」
授業が終わり、休み時間に入った途端に女子が俺の周辺から離れた。教室の角や、廊下などに、いくつかのグループが集まり、それぞれで何か話し合っている。そんな中、意を決したように2人組の女子が専用機を持っているのかを訪ねてきた。
「持っていますが、……なぜですか？」
「もうすぐ、クラス対抗戦っていうクラス代表のリーグマッチがあるんだ」
「うちや他のクラスは学校の訓練機を使うんだけど、1組のクラス代表が織斑君なんだ」
「カラドゥマンオウルさんはトルコの代表候補生で、優秀だけど、専用機だと機体スペックが訓練機よりも上だから優勝が難しそうなんだ」
「だからよければクラス代表になってくれないかな？」
専用機を持っている織斑一夏が1組のクラス代表。現在1年で専用機を持っているのは1組のイギリス代表候補生と織斑一夏、4組にいる日本代表候補生のみ。だが、日本代表候補生の専用機は開発

元である『倉持技研』が織斑一夏の専用機、『白式』の開発に人員を割いているため、未だ完成の目途すら立っていない。
待てよ……既に機体のフレームや外装だけは完成して、運び出されてはずだ……。
三月の始め、『白式』の開発が開始と同時に研究所より運搬された。別のチームが他の場所で組み立てと調整を行なっているのではないかと本国の研究員は言っていた。もし、そうだとするなら、調整とデータ収集のために日本代表候補生のもとに届いていてもいいはずだ。いや、既に届いているのかもしれない。
……訊いてみるか。
「4組にも専用機を持っている方がいると聞きましたが？」
「あぁ、更識さんね。けど……まだ無いっぽいんだよね」
「どうしてですか？」
「ごめん、何でかは知らないんだ」
ま、そこまで知ってるわけないか……。
「だけど持てたのは……その……お姉さんのおかげのような感じだから……」
いきなり、俺の左側の席を気にして、言い難そうに小声になった。横眼で女子が気にし始めた席を確認する。左二つ目の席には内側にはねた癖毛と長方形レンズの眼鏡が印象的なセミロングの少女が席に座っており、その横に座っていたカラドゥマンオウルが睨んでいた。席に座っている眼鏡の少女はわざとこちらを意識しないようにしているのか、一心不乱にディスプレイを見ながらキーボードを打っている。
そうか、あの眼鏡の方が日本の代表候補生……しかもカラドゥマンオウルとは親しい感じだな。
こちらを睨んでいたカラドゥマンオウルだが、先ほどから心配そうに眼鏡の少女、日本の代表候補生に「大丈夫？」や「気にしないで」などの言葉をかけている。どうやら、あの眼鏡を掛けた日本の代表候補生は「姉」と「専用機」にトラウマを持っているらしい。

おそらく、専用機を姉の威光で手に入れたと思われるのが、嫌なんだろう。
そう言えば、他国の代表候補生ってどれぐらいの実力があるんだ？
ふと、思った。スイスの代表候補生とは何度か闘ったことがある。生意気な奴や謙虚な奴、いろんな奴がいたが訓練を受けただけあってそれなりに強かった。他国の場合はどうなのだろう、どれぐらいの実力なんだろうか。
やべぇ、闘ってみてぇ……。
俺の行動原理と言っても過言ではない『闘争本能』。いや、闘争欲求というべきなのだろうか。相手と闘ってみたいと思うと堪らなくなる。最近満足のいく闘いができてなかった不満もあってか、闘いたいという欲求がより濃く、より多くなり俺に押し寄せる。素の自分を表面的に隠すことで欲求を抑えていたが、もう限界だ。抑えきれない。『闘いたい』という思いが溢れ出し、白い紙に染み込むインクのように心に広がり、染めていく……。

「なるほど……姉の七光で機体を得た妹で実力がないって訳ですか」
言葉が聞こえた瞬間、チチェック・カラドゥマンオウルは立ち上がり、声の主を睨みつけた。
「……」
テオバルト・ヴァイスマン。今日ＩＳ学園に入学した二人目の男子。
「チ、チチェ……い、いいから……」
チチェックは友である更識簪の制止を無視した。テオバルトの『あの言葉』が聞こえた時、専用機のデータを調整していた簪の指が

止まり、動揺している事がはっきりと見て取れた。
「今、なんて言ったの？」
「さぁ？」
「……」
「……」
黙ったテオバルトを拳を握り締め、睨む。
「あなたに簪の何がわかるの？」
「何もわかりません」
「なら、あんな変な事を言わないで」
「変な事？　あぁ、『優秀な姉の七光で機体を得たダメな妹』ですか」
「！！」
「チチェ！？」
チチェックはテオバルトの言葉に怒り、彼の頬に平手打ちを喰らわしていた。
簪にとっての憧れでありコンプレックス……更識盾無。学園最強の生徒会長であり、自由国籍を持つ現ロシア代表、そして簪の実姉。簪は姉にコンプレックスを持っている反面、まだ完成していない機体を実用化させ、追いつきたいとも考えている。まだ専用機が完成していない事とそう言った家族に対しての憧れとコンプレックスがあるという共通点から、いつの間にか友達と、理解者となっていた。だからこそ、テオバルトの言った『優秀な姉の七光で機体を得たダメな妹』という言葉が許せなかった。
「……」
「簪が専用機と日本代表候補生の座を手に入れたのは実力よ」
平手打ちを受け、平然としているテオバルトにチチェックは言い放った。
代表候補生は何人もいるが、国は限りあるコアを無駄にしないため、より優れたものに専用機を持たせる。実際に、チチェックがトルコの代表候補生になり、専用機を持つことを約束されるまでにな

るには並々ならぬ、努力と苦労があった。だから、簪が代表候補生の座を手に入れ、専用機を持っているのは姉のコネや威光では無いとわかる。だが、テオバルトは何の努力もせず男性であるというだけで専用機を持ち、簪を馬鹿にした。

（許せない！）

「そうですか……それで何ですか？」

チチェックは動揺せず、ただ平然といるテオバルトに苛立ち、平手打ちをもう一度したくなった気持ちを抑えた。今、怒りを暴力という形で彼にぶつけるのは簡単だが、ここで殴っても自分の憂さが晴れるだけ。何の解決にもならない。

「訂正しなさい。それで謝って、簪に……」

「……チチェ……もう、いい……」

後ろから簪の声がかすかに聞こえてくるが、チチェックがテオバルトを睨みつけるのをやめない。

「……カラドゥマンオウルさん……」

「……何？」

いきなり立ち上がり、目を合わせてきたテオバルトにチチェックは目をそらさず、睨み続けていた。

「よろしければ、自分と……」

そして、睨まれ続ける中、テオが言った。

「闘いませんか？」

第二話　昂進（後書き）

まだ戦闘に入らないとか、ダメだな。

第三話　喜々（前書き）

注意

初戦闘にもかかわらず、経験が足りず、見苦しいモノになっています。

アドバイスなどありましたら、感想に書いてください。

第三話　喜々

チチェックはテオバルトが放った「闘いませんか？」という発言が理解できなかった。

「……何、いったい？」

彼が軍にいたことは知っているが、操縦できる事がわかったのは公式発表で１週間前。ＩＳの訓練をしていたとしても、代表候補生であるチチェックの足元に遠く及ばない筈だ。つまり、ＩＳの経験が彼には足りていない。一組の織斑一夏がイギリスの代表候補生と模擬戦を行なっていた。もし、織斑一夏が勝っていたならば過信して闘いを挑んでくるのは理解できる。だが、武器の特性理解や経験が不足しており負けた。クラス代表にはなっているが。

（何を考えているの……）

疑いの眼差しを向けるチチェックに席から立ち上がったテオバルトは目線を合わせる為に少し身をかがめて話してきた。チチェックは女子の平均身長ぐらいはあるが、テオバルトに比べると低いため、どうしても屈まなければ目を合わせられない。彼女はまるでテオバルトに馬鹿にされているような気になった。

「自分はまだＩＳになれていません。ですから、トルコの代表候補生であるあなたに模擬戦という形でご教授していただきたいんです」

「なんで私がそんなことを―」

チチェックにそんな義理は無い。断ろうとした時、テオバルトが言った一言に言葉がとまった。

「あなたが勝ったら、謝ってもいいですよ。ただし、自分が勝った場合クラス代表は譲ってもらいます」

「……！！」

謝ってもいい。この一言はチチェックの怒りを再び燃え上がらせた。

テオバルトは心無い言葉で簪を傷つけた。チチェックは多少なり

と彼が反省していれば、少しだけ穏便に済ませようと考えていた。だが反省するどころか、「謝ってもいい」という上からの目線でものを言っている。
（人、簪を傷つけて……何様のつもり！）
友を侮辱された怒りだけでなく、チチェック自身が気付いていない専用機を簡単に手に入れた彼への嫉妬。目の前のテオバルトを倒さなければ気が済まなくなった。
「わかったわ……やりましょう」
怒りと未だ気づかぬ己の嫉妬を胸に彼女は闘いを承諾した。ただ、それらを彼にぶつけるために。

昼休み。模擬戦を申し込んだものの、まだこの学園に来たばかりで申請の方法など分からなかった。見かねたカラドゥマンオウルが訓練機の貸し出し申請のついでに模擬戦のアリーナ使用申請をしてくれるといい、職員室前で待っている。
締まらないというか、情けないというか……目の前の餌に釣られ、後先考えないところを何とかしないとな。
「失礼しました」
「どうでした？」
職員室から出てきたカラドゥマンオウルに声を掛けた。
「……あさっての放課後にアリーナで、詳細は明日、笠幡先生から連絡が来る」
白い目で睨まれた。カラドゥマンオウルの目は蒼いが……。
まぁ、そうだろう。相手を挑発して、闘いを申し込んだ癖にやり方を知らず、対戦相手にやってもらったのだから。相手からしたら「何なんだこいつ」と思ってあきれ返るだろう。睨む気持ちもわかるが、だからと言って俺は睨まれて心地よく感じる人間ではないか

らやめてほしい。
「そうですか、では……」
このまま睨まれ続けられるのは居心地が悪い。模擬戦の日時は放課後のアリーナ。詳しい事は明日笠幡先生からわかるし、特に訊くことはないし、立ち去るとしよう。
「約束、忘れないでよ」
立ち去ろうとした時、不意にカラドゥマンオウルが声をかけてきた。
「約束？……はて、なんのことですか？」
約束はさっきの簪とか言う日本の代表候補生に謝るってやつだろう。覚えてはいるが、ここはあえて嘘を吐く。わかりやすいぐらいにわざとらしく。
「！　私が勝ったら簪に―」
「謝りますよ。けど、自分が勝ったらクラス代表を譲ってくださいね」
わかりやすい嘘に引っ掛かったのが悔しいのか、また睨んできた。今度は顔を赤くしながら。『優秀な姉の七光で機体を得たダメな妹』とわざと聞こえるように言ったのも少し考えれば、挑発と分かるだろう。こいつが引っ掛かったことを考えると、意外と感情的でこういう駆け引きは苦手なのかもしれない。
面白いやつだ……。
「……いいわ。けど、そうはならない」
「勝算でもあるんですか？　訓練機で専用機に勝つ……」
「敵に手の内を明かすほど馬鹿じゃない……それに、どんな機体でも乗ってる人間がダメじゃ機体のスペック差なんて意味がない」
手の内を明かすような真似をしないのはさすが代表候補生と言ったところだ。
それにしても……
「乗ってる人間がダメですか……」
本人の目の前で言うとは……さっきの嘘への仕返しか？

機体のスペックが生かされるかどうかは、乗っている人間に関わってくる。実力者ならば、経験や勘から機体の癖を理解し、操ることができる。だが、実力がなければ、機体も十分に力を発揮できない。どうやらカラドゥマンオウルの中で俺は駄目な奴に分類されたらしい。

闘ったこともない敵をそんなに過小評価してもいいのかね……。

「明後日の試合はよろしくお願いします」

「……」

言ったものの返答はなし。無言のままカラドゥマンオウルは振り返ると何も言わずに立ち去って行った。

……まぁ、いいか。

俺の欲求を解消し、データ収集を『闘い』という形で手伝ってくれれば、あいつには用は無くなる。せいぜい楽しませてもらおう。専用機相手に訓練機でどんな戦いをするのかを。

明後日が楽しみだ。

第三話　喜喜

機体名『シュランゲ』、登録操縦者テオバルト・ヴァイスマン

（『全身装甲』？！）

チチェックはピットから開始地点へと移動し、テオバルトの機体を見て驚いた。機体情報は国家重要機密。相手の国が開示していなければ、知ることはできない。だから、どんな機体でも驚くつもりはなかった。だが、これは予想外過ぎた。

通常、ＩＳは部分的にしか装甲を形成しない。防御のほとんどがシールドエネルギーによって行われ、見た目の装甲は意味を為さず、

必要最低限しかない。防御特化型ＩＳならば、物理シールドを搭載することはあるが、彼の機体は異常である。

テオバルトのＩＳはカーキ色の丸みを帯びた装甲が全身を包んでいる。二の腕や太腿、関節を覆うダンゴムシのような節を持ち。胸から腹部、腕部と脚部を覆っている、アルマジロの甲羅に似た丸みを帯び、瓦のように重なった重厚な外部装甲。肩アーマー横には『リヴァイブ』のものより一回り大きい防護壁のような物理シールドが１枚ずつ。黒いＩＳスーツらしきものが所々見えているが、肌の露出はなく、頭部も装甲で覆われた、甲虫を思い起こさせるフルフェイスバイザーに隠れていた。

『両者試合を開始！』

試合開始のブザーが鳴るのと同時にオープンチャンネルで合図が出された。

今更、相手の機体を気にしてもどうにもならない。チチェックは反射的にブザーが鳴った瞬間に五十一口径アサルトライフル《レッド・バレット》を展開し、テオバルトへ向けた。

「落とす！」

今はただ、友を侮辱し、傷つけたテオバルトを倒すのみ。《レッド・バレット》の引き金を引ｉた。

「……」

銃撃を受けているにもかかわらず、避けず、防御もせず、テオバルトは右脇に抱えていたギターケースほどの、携行特化型ガトリング砲《バルカンｖｅｒ．　１３》を構えた。

（ガトリングなんて……）

ガトリングは面制圧に長けており、ＩＳといえどかなりのダメージを受ける。だが、銃身が回転（スピンアップ）するため、実際の発砲までにタイムラグがある。それに加えて、その重量から運用が難しい。《バルカンｖｅｒ．　１３》は威力を向上させつつ、重量を極限まで減らしＩＳ用に携行しやすくしたものと聞いている。それでもトリガーを

引いてから発砲するまでのタイムラグはあり、扱いが難しいはずだ。
（やっぱり装甲は並のＩＳよりかなり厚い）
予想通りというべきか、《レッド・バレット》の攻撃では『全身装甲』のテオバルトの機体に与えるダメージは少ない。ディスプレイに映し出される警告を確認。初弾が発射されるまでのタイムラグを計算し、ギリギリまで離脱せずに撃ち続けようとした時、《バルカンｖｅｒ．　１３》発砲を開始する。
「っ、早い！」
予想以上に早い発射に驚き、放たれた銃弾が機体に降り注ぐ。とっさに左肩アーマーの物理シールドで防ぎ離脱したが、物理シールドは大きく損傷し、防ぎ損ねた銃弾によってシールドエネルギーが大きく削られていた。
（通常より速射性と携行に優れたガトリング。丈夫すぎる装甲……反則じゃないの……）
そう考えたチチェックだが、どんなに強固な装甲を持つＩＳも機体全てが装甲なわけではない。実際、テオバルトの機体にも体の可動範囲を確保するためか、装甲と装甲の間には隙間があり、黒いＩＳスーツの生地が見えている。それに、ガトリングは遠距離射撃や狙撃に対しては威力を発揮できない。そして。
（何より……遅い）
彼女が三次元躍動による回避と射撃を繰り返していくのに対し、テオバルトは追って攻撃してくるが、すぐに距離が開く。出力をセーブしている様子はない。回避を全くせずに防御ばかりしている事から、最高出力が低く、回避が間に合わないのかもしれない。
（ならやっぱり……）
物理シールドで防御し、ガトリングを構え攻撃に転じようとするテオバルトの隙を突き、チチェックは背後に回り込む。六十一口径アサルトカノン《ガルム》を展開し、爆破弾を背中に放つ。爆発による衝撃がテオバルトを襲ったが、すぐに体勢を立て直し、チチェックにガトリングを向け、間髪入れずに２０？弾が飛んでくる。だ

が、チチェックは既に射程距離から離脱しディスプレイでテオバルトのシールドエネルギーを確認していた。
（やっぱり、装甲が薄い部分への攻撃が有効ね）
テオバルトのシールドエネルギーは大きく削れていた。
（よし、このまま削っていく！）
「……良いぞ……」
「……？」
突然、開放回線から声が聞こえてきた。センサーか、通信回線の異常かと思ったが、違った。
「ハハハ良いぞ、もっと闘え！！」
テオバルトが笑っていた。フルフェイスバイザーに覆われ、顔は見えないが本当にうれしそうに、不気味に笑っていた。

思わず、笑いが込み上げてきた。
楽しい。久しぶりだ。こんなに楽しいのは。
くだらない武装のデータ取りもなく。つまらない機体テストでもない。久しぶりに加減なく闘える。こんな闘いは久しぶりだった。
織斑の事が世界に知れるまで俺の存在はおかし過ぎた。外部に知られてはいけない。国家機密。自由に外には出られず、かろうじて訓練や合同演習には参加できたが、顔をバイザーで覆い。男と判らぬように、体のフォルムを隠すようなアーマーが機体に足された。
『全身装甲』なのはその時の名残だ。それでも不満はなかった。オイラー博士からの命令でもあり、なによりＩＳという兵器を駆り闘えるのが純粋に楽しかった。
「おっと！」
カラドゥマンオウルがまた隙をついて背後から撃ってきた爆破弾

を振り返るようにして左肩の物理シールドで防ぐ。同じ手に二回も引っかかるほど俺はお人好しの馬鹿ではない。携行特化した《バルカンｖｅｒ．　１３》とはいえ、さすがにガトリングだけではきつくなってきた。両腕で構えなければならないので隙が大きすぎる。

「っつ！」

攻撃が失敗し、慌てて後退するカラドゥマンオウルを追いつつ、《バルカンｖｅｒ．　１３》を収納した後、六十二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタディ》を展開する。

「っ！」

《レッド・バレット》の弾雨を受けながら、展開し終えた《レイン・オブ・サタディ》を連射しつつ、ブースターと背部スラスターをフル稼働させ接近する。

「この距離で当たる？！」

カラドゥマンオウルが驚きの声をあげる。今に装填されているのは通常のシェルではなく、スラッグ弾という一粒弾。ライフルには遠く及ばないが、通常の散弾に比べれば射程範囲が広い。もちろん、離れるほど威力も落ちるが、こいつは普通のスラッグ弾ではなく、ショットガンでライフルほどの反動と威力、射程範囲の遠距離射撃用に開発されたスラッグ弾。おかげで《レイン・オブ・サタディ》でもライフルほどの遠距離射撃が行える。

「くっ！？」

「！」

物理シールドで防御しつつ離脱しようとするカラドゥマンオウルに、射撃を立て続けに行なう。《レイン・オブ・サタディ》が弾をすべて打ち終わった時、ぎりぎりで左手に武装の展開が間に合った。角柱の形をした、四連ロケットランチャー《ブリッツシュラーク》を持ち、発射口である先端をカラドゥマンオウルに向ける。

５ｍという近距離にまで接近。カラドゥマンオウルが逃げ切れない距離。ここで《ブリッツシュラーク》を使えば、勝つ。爆発に巻き込まれて俺もダメージを受けるだろうが、『シュランゲ』の装甲

ならば、耐えられる。
　これが決まれば、俺の勝ちか……。
　久しぶりの模擬戦。もう少しだけ闘いたかったが、あまり機体に損傷を負わせるわけにもいかない。残念だが、終わらせる。
「終わりだ！」
「っつ！」
「がっ！？」
　だが、甘かった。カラドゥマンオウルは『瞬時加速』で飛び込んできた。既にトリガーに力を込め、放つ直前だった俺は避けきれず、腹部へのショルダーアタックで吹き飛びそうになる。腹から込み上げてくる痛みを無視し、ＰＩＣと姿勢制御スラスターで体制を無理やり変え、《ブリッツシュラーク》をカラドゥマンオウルへ向ける。が、腕をサマーソルトの要領で蹴り上げられ、砲身が上に向いた。
　くそ！　けど…おもしれぇ。
　カラドゥマンオウルの切り返しに興奮する中、真上に放たれたロケット弾はあさっての方向に飛んでいき爆散。腕を蹴り上げたときの反動を生かしてすぐさまカラドゥマンオウルは距離をとりつつ、《レッド・バレット》を展開し、射撃を浴びせてくる。
　くそ、リロードしてる暇はねぇか。
　弾切れの《レイン・オブ・サタディ》と《ブリッツシュラーク》を捨て、右肩のシールドでガードしつつ、その陰で《バルカンｖｅｒ．　１３》を展開する。
「！！」
　《バルカンｖｅｒ．　１３》の銃口が向いた途端、慌てて離れていくカラドゥマンオウルに容赦なく銃弾を放つ。すでにボロボロになっていた左の物理シールドを破壊するが、代わりにグレネードを投擲された。
「っつう！」
「なに！？」
　とっさに回避行動をとるも、機動力に難のある『シュランゲ』で

は間に合わない。当然のごとく、爆発の衝撃を受けシールドエネルギーが大きく削られる。爆煙が立ち込める中、さらに追い打ちをかけるように展開中の《ガルム》を向けられる。

やばい、いくら『全身装甲』でも墜ちる！！

強固な装甲に全身を覆われているため、絶対防御の発生する確率が低い。最も、それは外傷に対してだけで、爆発などの人体に衝撃を与える攻撃には通常通り発動する。外部装甲の一部損傷しているが、シールドエネルギーが３６％ほど残っている。腕でガードしたことで《バルカンｖｅｒ．　１３》にも大した損傷は見当たらない。しかし、もう一度（ガルム）の爆破弾を受けてしまえば、シールドエネルギーが良くて数％。最悪の場合０％になり俺の負けだ。

あれを使うか？

俺の頭に『シュランゲ』に搭載されている、《とあるシステム》を使う選択肢が現れる。あれなら、一気に勝つことも可能だ。だが、まだシステム調整中で完全には起動しない。それに安易に強力な武装に頼るのは、浅はかだ。機体の能力と自分自身の発想や智慧を生かして闘っていかなければ、いつかきっと死ぬ。

だから……。

《ガルム》の展開が完了。煙が晴れ、トリガーが引かれる。

そして・・・・・・俺は落ちた。

だが、爆破弾を喰らって、シールドエネルギーが０になったわけではない。ＰＩＣとスラスター、ブースター。すべての推進、姿勢制御装置を切った。『シュランゲ』が『全身装甲』だったのが幸い

してか、すぐに自然落下を開始。爆破弾は虚しく、俺の頭上を通過。流れ弾となり爆ぜた。
「っつ！」
止めていたＰＩＣと姿勢制御用スラスターを稼働させ、急停止。ＰＩＣでも停止時の慣性を制御し切れず、重力が体にかかる。
「ぬぅ！！」
思わず声が出たが、おかげで回避が成功。ブースターを起動させ、《バルカンｖｅｒ．　１３》を収納し、突っ込んでいく。
「いくぜ！！」
「！？」
丸腰で突っ込んでくる俺に若干驚いたようだが、カラドゥマンオウルは逃げる様子はない。それどころか、《ガルム》を構えたまま突っ込んできた。
あえて突っ込んでくるか……やっぱりこいつはおもしれぇ！！
急停止すると同時に両肩の物理シールドを両方切り離し、射出。二枚のシールドはロケットの如くカラドゥマンオウルに迫る。
「？！」
驚いたようだが、カラドゥマンオウルは一つを爆破弾で機動をそらし、もう一つを蹴り落とす。カラドゥマンオウルが発射された物理シールドに気を取られた隙に《レイン・オブ・サタディ》風の武器を展開、ブースターで加速し死角、カラドゥマンオウルの後方に移動する。
「！！」
「っつ！？」
《レイン・オブ・サタディ》から放たれた弾は放物線を描きつつ、俺のシールドを蹴落としたばかりのカラドゥマンオウルに飛んで行く。振り向いたカラドゥマンオウルは危険を察知したのか、俺と距離を開けるように、後ろに下がった。奴が今までいた場所で爆発が発生する。
「まさか、グレネードランチャー？！」

ショットガン型試作六十二口径連装グレネードランチャー《偽装グレネードランチャー》。グリップや細部は違うが、見た目は《レイン・オブ・サタディ》に偽装されている。見た目に騙されて大概の人間が喰うのだが、さすが代表候補生と言うべきか。

いい判断力だ。これだから闘いは楽しい！！

《ガルム》を向け、止めの一発を放とうとするカラドゥマンオウルに《偽装グレネードランチャー》を連射。やや上向きに発射した留弾は放物線を描き、飛んでいき爆ぜていく。

「っ！」

カラドゥマンオウルは狙うのをやめ、悔しそうに飛来する留弾の爆発を次々と回避していく。《偽装グレネードランチャー》を撃ち尽くし、投げつける。

「……」

投げつけた《偽装グレネードランチャー》は、すぐに蹴り上げられ、《ガルム》を向けられる。《バルカンｖｅｒ．　１３》を展開し始めているが、迎撃には間に合わない。

「これで、おわっ？！」

カラドゥマンオウルが《ガルム》の爆破弾を撃とうとした瞬間、背後から俺の飛ばした物理シールド

《自立機動型　防御板》が飛んできた。

《自立機動型　防御板》。簡単にいえば物理シールドのビット兵器。ビットとしての能力はなく、ただの空飛ぶシールドであるため、イギリスの『ブルー・ティアーズ』に劣る。だが、それは使い方次第だ。

今の体当たりではシールドエネルギーを削ることはできなかった。だが、《バルカンｖｅｒ．　１３》を展開する時間は稼げた。交互に《自立機動型　防御板》を飛来させられ、逃げ回っていたカラドゥマンオウルが銃身が回転し始めた《バルカンｖｅｒ．　１３》に気付き、上昇し逃げようとする。

だが、既に上空で待機していた《自立機動型　防御板》に、まさ

に『板挟み』といった状態で左右から挟まれた。
「？！」
《自立機動型　防御板》が《ブルー・ティアーズ》に優っている点がある。それはスラスターの出力。重厚な装甲版を高速で動かすために改良されたそれはミサイルと同等といっても過言ではない。
「ぐあぁあぁ！！」
二つの物理シールドに押し潰されるように挟まれ、身動きが取れなくなったカラドゥマンオウルに《バルカンｖｅｒ．　１３》の連射を繰り出す。

『試合終了。勝者―テオバルト・ヴァイスマン』

試合終了のブザーが鳴り響いた。

釈然としない勝ち方だが、今回は得るものもあった。
それに……面白い奴を見つけられた。
俺は挟まれていた《自立機動型　防御板》から解放され、悔しそうにピットに戻っていくカラドゥマンオウルを見つめていた。

第三話　喜々（後書き）

誤字脱字、ピンと来たら感想へ。

第四話　義姉（前書き）

武装神姫とデッドラやってたら遅くなりました。これからはなるべく早く投稿します。

第四話　義姉

「一夏さん、ヴァイスマンさんには関わらないほうがよろしいかと……」

学園寮の一年生専用食堂での箒とセシリアとの朝食中、セシリアがそう言い放った。

「え？」

今しがた口に入れた焼き鮭の最後の一欠けら。一夏はもう少し味わいたかったが、急いで咀嚼し飲み込んだ。

「なんでだ？」

テオはこの学園唯一の男であり、ルームメイトである。仲良くする理由はあれど、拒絶し距離を話す理由はない。食事に誘っても、断ってきたり愛想が悪いが、嫌な奴ではない。

「実は……日本周辺のアジア地域では知られていませんが、スイスはＩＳ開発において近隣諸国……いえ、欧州連合とその他各国から……嫌われていますわ」

聞き耳を立てていたのか、周りのテーブルから「あぁ」と言う声が聞こえる。

「え？　そうなのか？」

「知らん」

食後に緑茶で一服していた箒に話を振ってみた。箒は自分よりはＩＳに関する知識のあり、一夏は知っていると思っていたが、箒は知らないらしい。周りのテーブルを見てみるとアジア系、特に日本人の生徒が首をかしげているのに対して、ヨーロッパやアメリカ系の生徒が頷いている。セシリアの言った通り、日本ではあまり知られていないようだ。

「スイスはＩＳの有意性が証明されると、新たに『ＩＳ銀行』と呼

ばれる国立銀行作り、国家資金で欧州だけでなく世界各国からＩＳの技術者と専門家の引き抜き。融資の名のもとにＩＳ関係の企業に資金提供し、研究開発の資料と情報入手し始めました。現在もその方法で研究開発を続けており、好ましく思われてませんの」

「融資してくれてるんだろ？　なんで嫌ってるんだ？」

人員の引き抜きはどこの国家もやっている。研究資料や情報を提供するという事も、融資する側はその企業の将来性や持続性を見る上で融資対象の情報や資料提供は必要不可欠。引き抜きをされる国は堪ったものではないだろうが、融資される企業がある国家にとって自国のＩＳ開発が進み、喜ばしいことであるはずだ。嫌う理由にはならない。

「……引き抜かれる技術者や研究者は異端視されている方が多いのであまり問題にされてません。ですが、欧州連合に所属している国のＩＳ関連の企業と軍と取引のある製鉄会社や精密部品工場のほとんどは『ＩＳ銀行』から融資を受けており、中にはその融資がなければ経営が破綻してしまう所もありますの。ですから……」

「？」

「脅迫せれてるのと同じか」

「……はい。少しでも機嫌を損ねれば、ＩＳの開発が大幅に遅れることになります」

「あ！」

ＩＳは機械。普段は粒子化されているものの、本来は物質。ボディは様々なパーツによって構成されている。たとえ一つ欠けるだけでも機体に支障をきたすし、最悪動くことすらできなくなる。

「ですから、ヴァイスマンさんとは少し距離をとって接した方がいいですわ。噂では一部の情報を他国に売っているとも聞きますし……」

同じ欧州にあるイギリス出身だから知っているのか。はたまた、代表候補生として知り得た情報なのか。いずれにしてもスイスについても、そのＩＳ事情について、箒や一夏よりも知識や情報は確か

だ。
「けど、それはスイスのやり方だろ？　テオには関係ないだろ」
「専用機を持っており、現役の軍人。関係は大ありですわ。むしろそういった狙いがあるからこそ、ＩＳ学園に入学させたのかもしれませんわ」
「けど、テオはそんな感じしないんだけどな……」
「それは感づかれないようにしているだけなのではないのですか？」
「いや、テオがそうしたいんだったら、他の奴と決闘をする前に俺に挑んでくるんじゃないのか？」
「ふん、セシリアと同じでただ調子に乗っていただけだろ」
「な！？　箒さんあなた！　根も葉もないこと言わないでください！！」
言い合う箒とセシリアをよそに、一夏はテオの事を考えていた。
（箒の言う通り、調子に乗っているだけなのか？……）
テオの動きは調子に乗ってやっているようには見えない。自分の武器の特性を理解して戦い、相手の攻略法や弱点を叫んだりしていない。そして、相手が量産機であったものの、代表候補生相手に勝っている。調子に乗っていない、軍人らしい冷静な戦い方だ。
そして、試合中に吐いた狂喜に似たあの声。『闘え』というあの言葉。あれが一夏の中で引っ掛かっていた。
（わからない……なんだ、この違和感は……）
火と水が相まみえ、共存するような矛盾。一夏の中でテオに対する違和感は大きくなっていった。

第４話　義姉

テオバルトとチチェックの模擬戦が行われた次の日の夕方。放課

後の1年4組の教室でチチェックは自分の席で雲が泳ぐ青い空を見ていた。
「……チチェ……」
「！？簪……」
不意に声をかけられ驚いたチチェは相手が簪だとわかるとすぐに冷静さを取り戻した。
「もう放課後……」
「え？」
そう言われ、左手の腕時計を見ると既に授業時間は過ぎていた。周りを見渡すとクラスメイトは部活の準備や帰り仕度、残って話すなど思い思いの放課後を過ごしていた。
「大丈夫？」
「うん、大丈夫。心配させてごめん」
「……」
以前と心配そうに見つめてくる簪をよそに帰り支度をし始める。
「あ……」
「何？」
チチェが机の上に開いていたノートとテキストの中を見て絶句した。
「後で……今日の授業内容教えて……」
簪はチチェが広げたままにしているノートを見た。前のページ、昨日までの授業で教えられたところまでは完ぺきにノートが取ってあるのに対し、今日の分は最初の概略だけが書かれてはあるが、後は何も書かれていなかった。
「いいけど、珍しい……チチェが授業聞いてないなんて」
「……ごめん……」
授業を聞いていないことはほんとうに珍しい。それはチチェ自身も自覚していた。
（私……やっぱりだめね……）
昨日のテオバルトとの模擬戦以降、落ち込んでいた。友、簪に『

優秀な姉の七光で機体を得たダメな妹』と言ったテオバルトに勝負を挑んだものの、負けた。それどころか、今日、何度かテオバルトが話しかけてきたにもかかわらず、すべて無視してしまった。
（負けないって言っていたのに負けて……しかも勝った相手が話しかけてきたのに、拗ねて無視するなんて……）
勝てなかったのなら原因を追究し、対策を練るべきである。ところが自分はそれをせず、無視するという形でテオバルトにあたり、逃げている。
（情けない……）
チチェは何度目になるか分からない自己嫌悪と溜息をついた。
「……ねぇ、チチェ。私はヴァイスマンの事……もう気にしてないから……」
「え……な、なんで？」
簪の口からテオバルトの名が出たとき、チチェの心臓が跳ね上がった。
「……昨日、打鉄二式を調整しようと思って……整備室に行ったら……」
「居たの？」
「うん……それで……」
「そ、それで？」
「……謝られた……変なこと言って……悪かったって……」
「え、そう……なんだ」
内心ホッとした。もしかしたら、またひどいことを簪に言うかもしれないと心配していた。だが、チチェは自分がテオバルトに言わせられなかった事と、簪がまた悪口を言われるかもしれないとわかっていながら、簪を積極的に守ろうとしなかった自分に悔しさと怒りを覚えていた。
（……ほんと、わたしって口ばっかり……こんなんじゃ、兄さんみたいには……）
「ねぇ、ちょっといい？」

「「？」」
声の方を向くとブロンドのストレートヘアをした女生徒が立っていた。制服のリボンは黄色く、相手が2年生、先輩であることに二人はすぐに気がついた。しかし、チチェの知り合いではない。簪の知り合いなのかと思ったが、簪も首をかしげており、知り合いではないようだ。
「あ、ごめんなさい。ヴァイスマンって聞こえたからテオの事知ってるかなって思って、つい話し掛けちゃったの。」
「え、あ、あのお……」
「先輩はもしかしてヴァイスマン……君の知り合いの方ですか？」
恐る恐るチチェが訊ねる。先輩は少し考える素振りを見せると。
「ん？　知り合いって言うか、家族かしら？」
「「？」」
「ふふふふ」
訳が分からず、疑問符が出ている二人に先輩は微笑むだけだった

どうするか……。
『シュランゲ』の点検・簡易補修は一通り終わったが、2カ所無視できない場所がある。
まず、《自立機動型　防御板》。本来ならシールド状態では機体本体のブースターと連動し、内蔵した《ビット・スラスター》が稼働。『シュランゲ』の補助ブースターとしての役割を果たすはずだった。試合前のシステムチェックに問題なかったが、昨日のカラドゥマンオウルとの模擬戦ではエラーが発生し、補助ブースターとしての機能が働かなかった。

まぁ、仕方ないか。《自立機動型　防御板》は他の兵装と複合させられるかを実験した試作品。なら、エラーが発生してもおかしくはないだろう。
これ以上は自分の手に追えあないと判断し、モニターから目を離す。
とりあえず、『あれ』で装備を取替えよう。そんで、本国の研究員にシステム解析してもらうのがベストだろう。
床に置かれたジュラルミンケースを手に取ろうと、立ち上がった瞬間、視界が真っ暗になった。
「だ～れだ？！」
「……」
声と行動、そして場所で予測がついた。こんな下らない、ふざけた言動。なおかつ、この場所。ＩＳ学園にいる人間、それも俺の知り合いの中ではあいつしかいない。
まったく、相変わらずだな……。
わざわざ答えるのは癪なので、無視して振り返ろうとする。
「ちょ、まて！！　爪立てんな！！　俺の目を抉る気か？！」
少し体の角度を変えたところで、俺の目を押さえていた手は爪を立ててきた。食い込んできて地味に痛い。おまけに振り返られないように抑えられてこめかみが圧迫されている
「大丈夫！！　目が無くなったら、博士に視覚センサーを脳に直結してもらえばいいんだし！！」
「そんなんされてたまるか！！　手を離せ！！」
「まだ答えてないじゃない！！　後ろの人は誰―」
「マリ―だろ、どう考えても！！」
業を煮やして、と言うかこのやり取りに嫌気がさし、答える。
さっさと放してくれ……。
「ふぁいなるあんさー？」
「何だそれは！？」
「え！！　あなた知らないの？！　ミリオンな、あのクイズを！！」

「知るか！　早く放せ！！」
これ以上この状態で居るなんて冗談じゃねぇ！
俺の顔を振り向かせまいとして反対側に押してくるから、振り返ろうとした体の姿勢と顔の角度は９０度に達しようとしている。このままいけば俺の頸椎がねじ折られかねない。
「もう、テオったら相変わらず冗談が通じないのね」
「お前の冗談は笑えねぇんだよ！！」
力が弱めらた手を振り払い、向き合う。
「どこがよ？」
「はぁ……」
てんで分からないといった具合に手のひらを返し、肩をすぼめるジェスチャーをしてくる。我が姉の行動が相変わらず滅茶苦茶なのにあきれてかえって、ため息が出た。
マリー・アンベール。一つ年上の、俺の義姉である。ヨーロッパ中から様々な孤児を集め、ナノマシン投与による強化を研究していた研究所で俺とマリーは出会った。何がきっかけで義理の姉弟になったかは覚えていないが、マリーが昔とまったく変わっていない事ははっきり覚えている。いつもくだらない冗談を言い捲くっているあたりは特に。
「で、お前ら何で居るんだ？」
少しでもこの目の前の義姉の存在から目を背けようと、整備室の出入り口近くに居たチチェック・カラドゥマンオウルと更識簪に声を掛けた。
「わ、私たちが……教室にいたら……」
「その……先輩に声をかけられたの」
「テオがどこにいるかってね」
なるほど。俺のクラスに来て、目についたこの二人に話しかけて、案内させたわけか。
……ん？
「何で俺がここにいるってわかったんだ？」

「そ、それは……き、昨日ここに……来てた……から」
「あぁ、そういうことか」
昨日。模擬戦終了後に整備室で戦闘後のチェックを行なっていたところ、更識簪が現れた。整備室には入ってきたものの、俺がいたことでＩＳを展開するのを躊躇っていた。何故かはわからないが、俺の方が居心地が悪くなり更識簪が立ち去る前に『シュランゲ』を待機状態に戻して出ていった。まだ機体チェックを完全に終えていなかった為、残りを今日していた。恐らく、更識簪は俺が出ていった時点で機体チェックを終えていない事に気付いていた。そして、今日もここに来ると予想してマリーを案内したのだろう。
「まったく、ＩＳ学園に編入したっていうのになんで私に会いに来ないの？」
「別に会わなきゃいけない用事もなかったからな」
俺への命令は織斑一夏とその専用機『白式』の『シュランゲ』を用いたデータ収集。マリーにはＩＳ学園へ来たのだから挨拶はしておこうとは思っていた。だが、すぐに会わなければいけないわけではないので先延ばしにしていた。
「ひどい！！　それが数カ月ぶりに会う恋人に言うセリフ！？」
「……こ！？」
「恋人ですか？！」
「そう、テオの恋人のマリー・アンベールよ」
「……はぁ……」
ちがう。俺とマリーは姉弟の仲ではあるが、恋人の間柄になったことはない。これはもはや冗談の領域ではなく、ただの嘘だ。こんな事ですら冗談としてさらっと言うあたり、マリーは嘘吐きの素質があるのかもしれない。
「あ～、ため息なんてついて……何か悩み事？」
「二人とも……こいつは気にしないでくれ」
「「？」」
これ以上、変な冗談もとい、嘘を吹き込まれても困る。

「なによ、テオ。それが―」
「んなくだらねぇことやってるだけならさっさと帰りやがれ」
「せ……せっかく……テ、テオにあ、会いに……き、来たのに」
手で顔を覆い隠し、嗚咽混じりの声をを漏らしはじめる。おまけに膝からへたり込み、いかにも「自分は泣いています」って感じのジェスチャーをしやがる。
「だ、大丈夫……ですか？」
「な、泣かないでください」
「なんだ？」
「泣かしたまま放っておくなんて、ひどいわよ」
「いいんだよ、あいつの場合は……」
「「……」」
「何だよ」
「「……最低……」」
そりゃそーだ。男が女を、彼女を泣かしておきながら何とも思わねぇ奴は最低だろう。だが、本当に相手が悲しんで泣いてる場合だ。マリーが本当に泣く時はいつの間にか目から涙が流れている。まるで聖母マリア像が涙を流す奇跡のように、いつの間にか涙が流れているのだ。
こんな風に顔を手で隠して泣く時は・・・・・・。
「……マリー、嘘泣きは止せ」
「う、うぞ、嘘な、泣ぎな……な、なんて」
「じゃぁ、金輪際お前は赤の他人だな」
「もう。ちょっとはのってくれてもいいじゃない」
言った瞬間、スッと立ち上がり嘘泣きをやめる。
「お前の冗談は笑えないから無理だ」
久しぶりに会った義姉は相変わらずで、再開できたことに喜びを覚える反面、たっぷりの不安を抱えさせてくれた。
あ～、夢でリピートされたら胃に穴が開くな。絶対。

第四話　義姉（後書き）

あぁ、なんと滅茶苦茶な文。これもみんなフランク・ウエストの所為だ。

……嘘です。

第五話　鈍感（前書き）

明けましておめでとうございます。旧年中はお世話になりました。
本年もよろしくお願いします。
では、Ｓｋｙｒｉｍをやっていてこれからも遅くなる投稿です。

第五話　鈍感

マリー・アンベールこと、テオバルト・ヴァイスマンの義姉と出会ってから二日目。あれから放課後は簪とその手伝いをしているチチェよりも、先にテオとマリーは整備室に来ている。

「――で、今回の改良型は一旦本国に見てもらう。作動しないのはおかしいんだがな」

「確かにおかしいわね……ＩＳの自己調整システムによる影響は調べた？」

「あぁ。ＩＳが制御システムを調整したからだと思ってシステムチェックしたんだが、これと言って異常は無い。アーマー内も弄ったが――」

「……」

マリーとテオ。２人の会話が耳に届く。簪は自分の機体『打鉄　二式』調整しなければならないのだが、興味と羨ましさから手を止め、３０ｍ離れた右側の、二人の方を見てしまう。自分の機体よりも防御に特化した無骨なアーマー。ＩＳには珍しい『全身装甲』。ミリタリーアニメに出てきそうな形状も相まって『シュランゲ』が簪の好奇心をくすぐる。

そして、義理とはいえ、一つ違いの姉弟が仲良く一つの機体を調整している姿が羨ましく思えた。だが、自分と姉、更識楯無にはあんな風に接することはできないだろうと悲しさがその中に入り交っていた。

しかし今考えていてもどうにかなることではないと、あきらめるかのように頭を切り替え、止まっていた指を再び動かし、簪は『打鉄　二式』の調整を始めた。空中投影ディスプレイでデータを確認し、メカニカルキーボードでシステムチェックと調整をしていく。

（いくらか安定したけど、まだ駆動部の出力が上がらない……ＰＩＣの出力を少し下げて、代わりにパワーを上げて、供給エネルギー

量も調整。それで……）
簪はデータを呼び出しては数値を調整していく。内部の機構にも手を加えようと思い、手伝いを頼もうとチチェの方を見ると、借りてきた機材を点検していた筈のチチェは明後日の方を見ていた。視線を追っていくと、そこにはテオとマリーの二人。『シュランゲ』の装甲を開き、内部にケーブルを繋ぐテオ。呼び出したコンソールに指示を入力していくテオ。ディスプレーを指さし、二人で話し合い、アーマーを開いて内部をいじるテオ。時折、マリーがふざけるのをテオが嗜める。その光景をチチェが頬をほんのりと赤くし、羨ましそうに見つめている。
「チチェ？」
「え？な、なに」
「もしかしてテオバルト君のこと……好きなの？……」
「え？……え、え？！」
簪の言った言葉はチチェの思考を停止させ、混乱に陥れた。
（な、なに！？　簪は一体？！　私が…テオを…好き？！）
「な、何を言ってって！」
「チチェ！？」
動揺したチチェが機材につまずき、倒れる。心配し簪が近寄るが、よほど恥ずかしかったのか、チチェは立ち上がろうとはせず、顔を真っ赤にしてうずくまったままだった。
「だ、大丈夫？」
心配して声をかけるとやがて、チチェは小さく答えた。
「……簪の……意地悪……」
恥ずかしさからか、ほんのりと頬を赤くしたまま上目遣いで言ってきたチチェを、簪は同性ながら、ひそかにかわいいと思った。

第5話　鈍感

「うふふふ。かわいいわね、チチェちゃんって」
「何だいきなり？」
『シュランゲ』の内部調整と点検を終え、アーマーを閉じたところでマリーが笑い声を混じらせてつぶやく。俺に問いかけているのか、はたまた独り言なのか。どちらにせよ、なんでその考えに至ったのか。なぜいきなりそんなことを呟いたのか訊いておく。
「何でもないわよ」
マリーが珍しくため息をついた。
何だ……憂鬱なのか？
腕を組み、眉間に皺を寄せて考え込むジェスチャーをしているあたり、まだ余裕はあるようだ。が、深刻な悩みを一人で抱え込むようならば義弟として相談にのろう。何かと、マリーには世話になることがあったしな……。
「私、簪ちゃんの方見てくるから後はよろしくね」
「はぁ？」
そう考えながら、持ってきたジュラルミンケースを開けた時、マリーはそう言って左側の二人、チチェック・カラドゥマンオウルと更識簪の方に歩いていった。離れてＩＳを整備していたカラドゥマンと更識の二人は突然マリーが話に加わったことで慌てふためいた。特にカラドゥマンオウルの慌て様は凄まじい。せっかく並べ直した機材をぐちゃぐちゃにして、尻もちをついた。作業用のツナギを着ているから汚れるのは問題なさそうだが、これ以上機材にぶつかっ

たると壊す可能性がある。その前にカラドゥマン達を止めに行こうかと思ったが、マリーが言葉を発すると二人ともいきなりおとなしくなり、立ち話を始めた。

これ以上見ていても時間の無駄になるというか、見てると余計に心配が増して作業が滞る恐れがあり、あえて無視することにした。

先ほど空けておいたケースから中に入っていた直径１０センチほどの金属製の円筒を取り出す。『武装粒子化収納装置』。通称『ボックス』。円筒の缶なのに『ボックス』って名前はどうかと思うが、使い勝手はかなり良い。機体の専用接続口へケーブルで繋ぎ、コンソールで操作するとＩＳに収納もしくは装備されている武装をこの『ボックス』へ量子状態で保存。または、保存されている武装をＩＳに量子状態でインストールできるという代物だ。他国にも似たようなものはあるが、アタッシュケースやジュラルミンケースで持ち運べるサイズで武装一つを収納できるほど小型化し、実用しているのは今のところスイスしかない。『シュランゲ』の背部、装甲強化ブースターの中間の本体アーマーを開く。そこにある専用接続口と『ボックス』をケーブルでつなぎ、コンソールを呼び出す。肩の武装、《自立機動型　防御板》を『ボックス』に収納するよう指示する。

収納完了まで、３０分か……。

《自立機動型　防御板》に代わる別の武装はまた別の『ボックス』をつなぎコンソールで指示を出すだけなので保存が終わるまでの間が手持無沙汰になる。何か先にしておくべきことはないかと考えたが、『シュランゲ』のシステムとパーツ検査と調整は既に終えており、やるべきことは武装の変更と変更後の調整のみである。

「ん？　何か用か、チチェ？」

人の気配と、ＩＳ用の濃い機械油のような匂いのする特殊な潤滑剤を感じて左後ろを見ると、カラドゥマンオウルがおずおずといった感じで近づいてきていた。銀髪と褐色の肌が印象的なカラドゥマンオウルだが、ほんのりと頬が赤くなり投影型ディスプレイからの

光が銀髪に反射してうっすらと青みがかり、妙に幻想的だ。雰囲気もいつもの生真面目な感じではなく、伏し目がちでどこかしおらしく、まるで別人のように思える。
『チチェ』か……以外に人の愛称って抵抗なく言えるんだな。

「ごめん……なさい」
マリーが簪とチチェに連れられて、俺へ会いに整備室へ来た日の事だ。自分の機体を調整し始めた簪にマリーが何故か興味を示して、獲物に巻きつく蛇のようにまとわりついた。その光景に「何をやっているんだ……」と、呆れて目をそむけるとチチェが近づいて、言ってきた。
「……いきなり何ですか？」
「……試合の後、無視して……ごめんなさい」
最初はいきなり謝られ、訳がわからなかった。だが、試合後に無視していたことを謝っている事がわかると『謝ってきた理由』よりも聞いてもいない『無視していた理由』に納得してしまった。
要は友人を馬鹿にした、嫌な奴とは話したくなかったんだろう。
組織行動をする場合ならば、嫌々でも割り切ってもらうが、ここでは同じ一兵卒もとい学生。嫌々話すことを強制する権限はないし、しようとも思わなかった。
「そもそもの原因は自分が更識さんを傷つけたことにあります。カラドゥマンオウルさんが謝る必要はありません」
「け、けど……」
「こちらの非礼をどうかお許しください」
姿勢を正し、頭を深く下げた。カラドゥマンオウルに話す時間を

与えないように矢継ぎ早に話して謝まる。最近では体裁を取り繕うために謝ることが多かったが、今回は違う。欲求を満たすために他人を貶めるなどあってはならない。『闘い』とは本当の意味での『強者』へと至る道。本当の『強者』は『闘い』の手段から結果まですべてを自分で選ぶ事が出来る。俺の『強者』に至る『闘い』の道は正々堂堂とした、誰にも恥じることのない『戦闘』。それすら守れなかった俺は『強者』となるにはほど遠い。だからこそ、自身の罪を認めて償わなければならない。ただし、カラドゥマンオウルや更識に対して本当に悪いと感じているのかは分らないが……。

「簪にもちゃんと謝ってくれたみたいだし……別にもう、気にしてない……」

「そうですか……」

「……」

話は終わったはずだが、後ろで依然としてカラドゥマンオウルはその場を動こうとせず、こちらをチラチラと見つつ、もじもじしていた。

「チチェちゃん。テオとの話終わった？」

まだ何か言いたいことがあるのかと思い、振り向いて口を開こうとすると、カラドゥマンオウルの後ろにマリーがいきなり現れた。

「は、はい。じゃぁね……ヴァイスマン……君」

マリーの登場に若干驚いていたようだが、平静を取り戻し、カラドゥマンオウルは更識の所に戻ろうとする。名残惜しそうに、若干悔しそうにみえる、その後ろ姿へなんとなく、言った。

「……テオで……良いです」

「え？」

振り返ってこちらを見たカラドゥマンオウルの顔は鳩が豆鉄砲食らって死んでしまったかのようにあっけにとられ、頭の中で言葉を何回も反芻して理解しようとしているようだ。

「テオバルトを略してテオです。そちらの方が呼ばれ慣れているので、よければそう呼んでください」

マリーや何人かの親しい仲間からそんな呼ばれ方をしていた。
「じゃ、じゃぁ……私のこともチチェで良い」
「そうですか。では、チチェ、また明日」
「あ、あと……テ、テオ……」
「はい？」
「け、敬語じゃなくていいから……さっきみたいにラフな感じで話して……くれない？」
しまった……マリーとここで会ったときに二人へプライベートでの話し方で話しかけていた。いくら知り合いと話していたからとはいえ、素のままで他人に話しかけるなんて気を抜きすぎだ。そう反省し、今まで以上に気を引き締め、気をつけようと誓った。
「……だめ？」
カラドゥマンオウル、チチェが上目づかいでこちらを窺ってくる。ここで断っても、『シュランゲ』と『白式』のデータ採取任務へ支障はきたさない。が、一夏と同じで親しくなっておけば、何らかの形で後々役に立つだろう。
「……わかった。またな、チチェ」
「うん。じゃあ、私は簪と戻るから……またね……」
そういって、カラドゥマンオウルもとい、チチェは顔を真っ赤にして簪のもとに早歩きぐらいの速さで駆けて行った。

それにしても……なんであんなこと言ったんだ、俺。
チチェに愛称で呼ぶように頼んだのは自分でも驚き、信じられなかった。俺は内外問わず、出会って一週間ほどの人間に愛称を呼ばせることは少ない。いや、無い。単に外部の人間と出会う機会が少なかっただけかも知れないが、秘密裏にＩＳの訓練をしていた頃は

軍が信用のおけると判断した人間とは何人も会っている。それでも、内外の顔見知りの人間に俺の愛称を呼ぶ人間は数えるほどしかいない。

そんな俺がなんで……よくわからんな……。

「ねぇ、テオ？」

「すまん、なんだ？」

この前の事を思い出していて話を聞いていなかった。

「え、えっと……笠幡先生から『私』の代わりに『テオ』にクラス代表戦へ参加してほしいって話聞いた？」

「なに？」

『俺』が『チチェ』の代わりにクラス代表選へ？

「なんでそんな話になってんだ？」

考えられる理由はこの前行ったチチェと俺の模擬選だ。あれが原因で教官方もとい、先生方が勘違いして俺がクラス代表にしてしまったのだろうか。そう思って聞いたが、チチェから返ってきた答えは俺の予想とは違っていたが当たり前と言えば当たり前の理由だった。

「学園の上からＩＳを使える男二人の実力を把握しておきたいって言われて変更になったらしいの」

「なるほどな……」

共通して特異事例の男で専用機持ち。違いは東洋系か欧州系と言ったことぐらい。この二人のデータを採取、比較すれば『男がＩＳを動かす方法』または『今後特異事例が発生した場合のサンプル』など多くの事に使える。それはもちろん『各国との交渉カード』としても役立つ。特に織斑の場合は執拗に政府からの身柄引き渡し命令が来ている。その際にこのデータを小出しに提出し、交渉することで身柄引き渡し命令を棄却させることはできなくても、先延ばしにすることぐらいはできるはずだ。

「も、もし嫌なら私から先生の方に……言っとくから……」

「いや、大丈夫だ。ぜひ出させてもらう」

『シュランゲ』の新しい追加武装の組み合わせを実戦形式で試す良い機会だ。渡りに船とはまさにこのことだと、すぐさま返事を返すと目があったチチェは、顔を真っ赤にして驚いた顔をしたものの、すぐに目をそらしうつむいてしまった。
「そ、そう……じゃぁ笠幡先生に言っておくから。……が……」
「？」
「が……がんばって！！」
「あ、あぁ」
後半、チチェが声を絞り出して何を言おうとしているのか分からず、近づくといきなり顔をあげて言ってきた。その際、偶然にも顔が近くなった。目が合った瞬間、顔を真っ赤にしてチチェはすぐ簪の元へ戻ってしまった。
なんだったんだ？
「ふぅ～ん」
「ニヤニヤしてどうかしたか？」
「いえいえ、テオもやるようになったな～って思って」
悩んでいた俺を真横で手で口元を隠すようにしてニヤニヤしながらマリーは俺を右ひじで小突いてきた。
「……なにがだ？」
何故、俺がやるようになったらニヤニヤしながら小突かれなければならないのだろうか？　だいたい『やる』ってなんだ？　『何』を『やる』んだ？　わけがわからん。
「え？……わからないの？」
「あぁ」
恐る恐るといった感じに言ってきたマリーに即答する。分からないものは分からない。
もしかしてあれか、高度な冗談だったのか？　そうだとしても、いつもの冗談とは毛色が違うような気がする……。
「……テオ……」
マリーから冷ややかな視線が俺に放たれ、突き刺さる。

「なんだ？」
「あなたいつか刺されるわよ」
「刺される？　なんでだ？」
なに物騒なことを言い出すんだこの義姉は。
「はぁ……チチェちゃんがかわいそう……」
「チチェがどうしたかしたのか？」
「何でもないわよ」
そう言って頭痛で頭が痛むかのように頭を押さえつつ天を、天井を仰ぐ。
なんだが、今日のマリーはいつもに増しておかしいな……。
そう思いつつ、俺は残りの作業を再開した。

「だから、部屋を変える必要はないと言っていっているだろう！！」
「篠ノ之さんが決めることじゃないでしょう」
さて、マリーたちと整備室で別れた後、いつも通り一人で食堂で夕食をとり、夕食後に部屋に帰ってきてベッドで一休みしているところにポニーテルをした織斑の幼馴染、篠ノ之がやってきた。「一夏に貸した練習用の竹刀を受け取りに来た」とかで部屋に上がり、織斑がまだ戻っていないことを告げると「黙って持っていくのは礼儀に欠けるので待たせてもらう」と言ってドア付近の壁に立て掛けてあった竹刀には目も触れず、窓側の、一夏のベッドに腰掛けた。勝手に上がりこんできて礼儀もくそもあるのか？と思いつつ俺は再びドア側の、自分のベッドに寝転がり、大型物理シールドビット《自立機動型　防御板》を外し、新しい武装を搭載した『シュランゲ』の拡張領域に量子変換する武装を何にするかＰＤＡをいじりながら考えているとドアが勢い良く開く音と「一夏居る？　話があるんだけど～？」という声が響いてきた。その声に反応しいち早く動いた

のは部屋の主の一人である俺ではなく、篠ノ之だった。聞こえるなりすぐにドアのほうに走っていき「なんだ貴様は！！」と言って訪問者に詰め寄った。それからというものの、『俺の部屋』でもあるというのにこいつらは俺を無視して「部屋代わりなさい」「断る」の会話を延々と繰り返している。

夢で見る現実のリピートの方がマシじゃねぇか……。

気になってちらっと見た所、凰鈴音というツインテールの織斑の言っていた幼馴染第二号中国代表候補生は余裕があるのかおとなしくはなしているのだが、篠ノ之はさっきから怒鳴りっぱなしだ。耳障りなのだが、ここまで叫び続けていると逆に篠ノ之の喉は大丈夫かと心配になってくる。うるさいことには変わりはないが。

「とにかく今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるな！！　そんなことゆるさん！！」

そういえば、さっきから凰は何を言っているんだ？　以前は織斑と篠ノ之は同室であったが、今は別の部屋に移っている。それなのに篠ノ之に「部屋を代わって」と言うんだ？　そして、何故篠ノ之はそれを断っているんだ？　別室なのに。

「ただいま～って何してんだ二人とも？」

俺が篠ノ之の金切り声をＢＧＭにして凰のおかしな交渉と、部外者である篠ノ之の勝手な拒否の理由を考えているとドアが開く音と共に一夏が帰ってきた。

「あ、一夏！！　あんた今までどこ歩つき歩いてたのよ！？」

「何だよいきなり。つか、何で鈴がここにいるんだ？」

「え、えっと～……ほ、ほら。あんたが女子と一緒の部屋だって聞いたから、さびしかったり窮屈な思いしてるんじゃないかな～って思って来たのよ」

「う～ん……今はルームメイトはテオでそんなに寂しくないし、わざわざ鈴に代わってもらう必要はないな」

「テ、テオ？……誰そいつ？」

「え？　俺のルームメイトだよ。もう一人の男」

「も、もう一人の男？！　どこに居んのよ、そんな奴？！」
「ここですよ」
ベッドから立ち上がり、あの3人が密集するドアの前に行くのは面倒なので、ドア前から見えるように角から頭を出す。俺を見た瞬間、凰がうなだれて持っていたボストンバックを床に落とした。
そんなに俺がいたのが残念か……。
「けど、ありがとうな。心配してくれて」
「え？　ま、まぁ～小学校からの付き合いだしね。それぐらい当然よ」
うつむきながら、わなわなとし始めていた凰だったが、織斑に声をかけられると上機嫌になった。
「……ふ～ん」
「ん？　なによ、あんた」
角から顔を出して見ていた俺に気がついた凰は『訝しい』といった感じの顔をして睨む。
「いえ、ずいぶんと都合がいいと思いまして……」
「はぁ？」
「顔なじみであることを利用して一夏のデータを盗みに来たんじゃないですか？」
「な！？　何言ってんのよあんた！！」
声を掛けられてすぐに上機嫌になるなど、恋する乙女でもないのにおかしい。さらに、織斑が入学してから少し期間は空いたものの、顔なじみの凰が転校してくるなど出来過ぎている。俺のように織斑に接触し、データを盗むことが目的としか考えられない。
「では、何故今日この部屋に来て、あそこまでしつこく部屋を代われと言ったんでしょうか？」
「そ、それは……」
無理やりにでも同室となることは織斑のデータを収集する上で理想的だ。しかも、凰は女。織斑の性格から考えると既成事実さえ作れば、自国に引き込むこともできる。あれほどまでにしつこく部屋

の変更を要求する理由はそれぐらいしかない。
「ちょっと待てよ。鈴はそんなことする奴じゃないぜ」
「……まぁ、一夏がそう思いたいのでしたらそれでよいんじゃないですか」
そう言い残して、再びベッドへ横になってＰＤＡを起動する。若干織斑が怪訝そうな顔をしていたが、関係ない。そういった可能性があることを考えていないのは『人を信じる』というある種の才能の賜物か。それとも、『愚者』なのか。何れにせよ、織斑が『人を信じる』という才覚の持ち主だろうと、タロットの『愚者』のカードであろうと関係ない。俺にとってみれば、利用できる手札が増えただけだ。それを使うかは分らないが……。
それよりも今は『シュランゲ』の入れ替え武装の候補を選択しなければならない。やっぱり前段階の物に入れ替えたから、相性の良かった『アレ』を拡張領域に追加するべきだろうな……。
「ところでさ。一夏、約束覚えてる？」
「えーっと、――――――」
入口付近より聞こえてくる会話は耳に入っては来るものの、頭には入ってこない。ただの雑音や生活音と同じで耳から抜けていく。
前段階の物は《自立機動型　防御板》より一回り小さい物理シールドビット。チチェとの戦いのときのようにいきなり飛ばし、あいてを撹乱、攻撃なんてこともできるが、基本的な運用はただの物理シールドと同じである。イメージした座標にビットが自動で向かうため、ＢＴ兵器とは違い指示は短時間で簡単だが、どのような軌道を描くかなど細かい操作ができない。ただの空中固定型の防御壁である。
さて、じゃあ『コイツ』と『コレ』を……！？
その時、一夏の言葉を遮るように乾いた音が気持ちが良いぐらい部屋に響いた。
ベッドから飛び起き、入口近くにいた一夏と凰、篠ノ之を見遣ると、一夏が赤くなった頬をおさえ、凰が目元に涙を浮かべ、悔しそ

うに唇をかみしめていた。
「最っっっ低！　女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！！　犬に噛まれて死ね！！」
　凰は足元の床に置いてあった自分のボストンバックを引っ掴むと、その一言を残して、部屋を出ていった。
「なんなんだ？」
「一夏」
「ん？」
「一夏、馬に蹴られて死んでしまえ」
　篠ノ之は触れれば冷たいを通り越して痛いと感じるほどの冷たき目で織斑を睨み貸していた竹刀を持って出て行った。
なんだ？　犬に噛まれて死ねだの馬に蹴られて死ねだの、物騒だな。日本の慣用句か？
「なんなんだ、いったい」
織斑がわかっていないあたり、そこまで知られていないマイナーな語句かもしれん。
一応、話しの種がてらマリーへ知らないか尋ねるか・・・・・・。
「なあ、なんで俺殴られたんだと思う？」
「さて、なぜかででしょうか？」
知らねーよ。
　武装の候補のピックアップの完了。そして、さっきの一夏とのやり取り興がそがれ事もあり、ＰＤＡをしまい、ベッドの布団にくるまり寝る事にする。夢を見る可能性もあるからできることなら眠りたくはない。だが、いつの日も夜が更け、眠りの時は来るものだ。
そんな贅沢は言っていられない。
「おやすみ……」
「え？　あ、あぁ……」
　一夏に「おやすみ」と言って目を閉じるとすぐに睡魔が襲ってきた。
　思っていた以上に疲れてたんだな……そういえば、明日はクラス

代表戦の各クラス代表を調べておかないとな。

おもしろいことになりそうだ……。

第五話　鈍感（後書き）

なんかめちゃくちゃだ。
ああ、眠気が……ＺＺＺＺＺＺＺＺＺ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6552t/

IS　インフィニット・ストラトス　中毒者

2012年1月1日01時50分発行